都名所圖會

右白虎
再

内閣文庫
和書類
一一一五七號
六冊
七二函 一四架

太政官文庫
和書門
一一一五七號
六冊 函 架

内閣文庫
番號 和 11157
冊數 6（4）
函號 172 179

風 二十

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

五七七

都名所圖會巻之四目錄

右白虎

月輪寺　時雨櫻　高野瀧　日暮瀧

朝日峯　白雲寺　樒の原　火伏権現

清瀧川　嵯峨化野　念佛寺　往生院

三宝寺　小倉山　二尊院　浄金剛院

歌石

時雨亭　厭離庵　定家古跡　為家卿墳

愛宕山並龍圖　長明神　西行古跡　車僧塚

清涼寺　嵯峨帝塔　融大臣塔　大覺寺

大澤池　菊嶋　庭湖石　名古曽瀧　相澤池　廣澤池

僧正遍照古跡　遍照寺山　千代古道　鹿の聲聞處

野々宮　常寂寺　芹川　歌詰橋

薄馬場　亀山　天龍寺　嵐山

明治十三年購求

大悲閣 大井川 渡月橋 千鳥淵
ごかせの淵 小督塚 臨川寺 有栖川
法輪寺 西行桜 桜のりれ淵 車折社
帷子辻 安堵橋 常盤社 太秦広隆寺
牛祭圖 木嶋社 地蔵堂 海生寺
梅の宮 梅津川 西院春日社 松尾社
葺ありの淵 月讀社 華厳寺 衣手社
葉室西芳寺 地蔵院 唐櫃越 浄住寺
天鼓森 上野橋 桂川 桂の里
久遠寺 光如上人墳 大江坂 時鳥聞淵 峠地蔵
大原野春日 花の寺 朧清水 日野嶽
西行桜 せゝらいの水 翁の瀧 長岡都
栢社 西岩倉 三鈷寺 癸嶽

善峯寺 小塩山十輪寺 在原業平塔 塩竈古跡 塩汲池
業平母公塔 朱雀権現堂 源為義塚 水薬師
辨天社 西寺古跡 山伏塚 松尾祭礼の図
唐橋 吉祥院天満宮 鳥羽里 實相寺
貞徳翁墳 地蔵堂 こい塚 下鳥羽恋塚寺
法傳寺 横大路 牛車圖 久世里 蔵王寺
琴弾橋 鷲尾寺 福田寺 坂井清水
羽束師森 向日明神 真経寺 寺戸願徳寺
乙訓寺 粟生光明寺 奥海印寺 寂照院
楊谷観音堂 長岡天満宮 小倉明神 円明寺
帰海印寺 山崎 離宮八幡宮 宝寺
観音寺 八大天王 妙喜菴 天満宮社
宗鑑古跡 関戸明神 谷観音堂

月輪寺
白石
清女社
本堂
時雨の桜

愛宕山
星の峯
丹波 亀山ゟ
春日
朝日
月輪道
渡猿橋
清滝川
一鳥井

愛宕山のやしろハ王城の乾にして朝日嶽白雲寺と號す一の名ハ愛宕護とかり
坂路五十町ありてなかほどに試の峠あり清瀧川落合猿橋火燧権現ハ
十七町目にあり樒が原ハ山の麓にして南星峯とハ乾にありこの嶺を
いふ鐵の華表の額ハ表を朝日山裏を白雲寺と書り　曼殊院良恕法親王の筆なり

新古　降積る嶺のみ雪解にけり清瀧川の水の白波　西行法師

日　岩根こえ清瀧川の早けれバ波折かくる岸の山吹　権中納言國信

拾遺夏　時雨にハ白妙ふれしもあさごとに樒か原の色ハかハらし　匡仲

本殿ハ阿太子山権現にして祭所ハ伊弉冊尊火産霊尊又本地ハ
将軍地蔵を安置し帝都の守護神として火災を永く退け給ふ
其代ハ鷹が峯にありしを光仁天皇の御宇天應元年に慶俊
法師此山をひらきて勧請しぬ　一説にハ天竺の日羅唐土の是界日本の太郎坊此三鬼ハ衆魔の大将にて文武帝の御宇大宝
年役小角泰澄の両人此悪鬼を退治せんと當山の幽谷の岩屋に入て祈念す小黒雲忽ち現して霊験
を祈る愛宕山ハ子黒雲を拂ひ地蔵を両聖人に示し給ふ小黒雲忽晴して白雲となる故に
白雲寺と号す則中に地蔵龍樹布留那毘沙門天王のこと出現しけれバ
詞字の尊像ハ甲冑を帯し将軍の形を現し給ふより當社の建立を勅を蒙り

て和氣清麿に命じ例祭ハ四月中の亥日にして神輿二基あり嵯峨清涼寺
にてすみしぞ
鎮守の御旅所として野々宮に振る神供を備ふまた嵯峨　六月廿四日ハ
千日参りとて宵より群集し同毎月縁日にも老人ハ四竹輿に乗りて攀
られ婦人童子ハつゑにすがりて万仞の嶮しきをいとハず坂路の茶店に休
らへバ白雲目の前を横ぎるあるひハ土器投げに興じて足のつかれを忘る抑
山城國一二に列なる高山にして炎暑の頃も峯寒し道ハ嶮難なりといへ
ども常に詣人おほく賑しきも只権現の威徳ぞかし

鎌倉山月輪寺ハ愛宕の山腹にあり　鐵の鳥井より左へ下る　七十三町あり　當寺の本尊ハ十一
面観世音を安置す祖師堂にハ空也上人親鸞聖人月輪殿下の像あり
開基ハ慶俊法師中興ハ九條関白太政大臣兼實公也

龍女水　空也上人此地に幽居し給ふ時當山寒燥にして龍女婦人に化して此地に閑居し給ふ故に月輪禅定と称す
形を上人に顕し妙經を授り忽成仏を遂報恩として後山の岩窟より
清泉湧出る是を龍女水といふ今に涸減する事なし　所謂時雨桜　堂の前にあり
親鸞聖人配所に赴き給ふ時此所に来りて當山の用水を侍に語り女のやしろあり
小國を遷の時兼實公名残を惜しみ給ひ自他の像を遷し別をかなしまれし此桜
ちり時雨と今も称せりまた時雨桜とかなしみしと云

三寶院

往生院
祇王寺
念佛寺
福田寺
歌石
平山
静恵院

化野は小倉山の北の麓なり念佛寺の本尊は阿弥陀佛にして湛慶の作なり福田寺は南朝の帝後亀山院の陵あり諱息院の本尊は倶生神にして小野篁の作なり焔魔王の像は弘法大師の作なり地蔵菩薩は満米上人の作なりとぞ

妓王寺は浄土宗にして往生院と号す　いにしへは西の山上にありしを後世今の地にうつせり本尊は阿弥陀佛にして脇士は観音勢至なり清盛入道浄海の塔　祇王廿一　祇女十九　佛十七　刀自四十五　祇王祇女の母の塔も庵室の前にあり

平家物語　入道相国いかにも叶ふまじき由重ねてのたまひければ祇王力なく出べきに定められし一樹の陰にやどり同じ流れをむすぶだにわかれはかなしきならひぞかし　いはんや是は三年が間住なれし所なれば名残も惜しく悲しくて、かひなき涙ぞこぼれける　さてしもあるべき事ならねば祇王いまはかうとて出けるが、なからん跡のわすれがたみにもとや思ひけん、障子になくなく一首の歌をぞかきつけける

もえ出るもかるゝもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき　祇王

平相国は妓王に飽て起られしと寵せる家妓を軽んじて棄擲す　愛して朝槿を与へけるありて佛の前を挙しければ一首を遺しく

あはれ深き後の錦は粧ひとも紅葉を夜衣にかへても佛も我身のうへの秋ぞとも悟りしけん　法をもとめて四分の道心堅固にして目出度き義女なりけり

三寳寺は祇王寺の南に隣る　これも往生院と号す　本尊は阿弥陀佛　又滝口入道横笛の像は安阿弥の作　開基は良鎮上人といふ人は門の主人にあり

小松内大臣の侍士滝口時頼といふ者あり　又建礼門院の曹司横笛は容顔美麗にして旧き契りあり　時頼の父これを聞て滝口を諫めけるゆゑ、横笛が事を思ひ絶ちて滝口は世を厭じて出家し此寺に隠れしに横笛尋来りしに滝口はあはざりければ泣々此石に一首の歌を書し大井川千鳥が淵に身を沈め終る

梓弓ゑしても何か恨むまじ引く人をなき身にしあらねば　横笛

是は当院の説にして此歌を石に彫刻せり　平家物語には此説にあらず　滝口は清浄心院にありて横笛もそれと聞て尋ね来りければ滝口は逢ずして高野へ上りける　滝口入道一首の歌を送りける

そるまではうらみしかども梓弓まことの道に入るぞうれしき　滝口

返し

そるとても何か恨みん梓弓ひきとゞむべき心ならねば　横笛

其後横笛は奈良の法華寺に籠ると云ふ　其思ひの積りにや幾程なくはかなくなりしとなり

二尊院

古今

夕月夜小倉の山に啼鹿の声の内にや秋ハくるらん　貫之

小倉山二尊院は愛宕の南にあり宗旨は天台・真言・律・浄土四宗の兼学なり

風雅　小倉山麓の寺の入相にあらぬ音まがふはつかりのこゑ　俊成

続後撰　小くら山ふもとの里の夕霧に宿こそ見えね衣うつなり　順徳院

新千載　夕ざれは霧立のぼる小倉山やまのはしかに鹿ぞ啼なる　従金右大臣

新古今　小くら山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるゝ月をみるかな　西行

當院の本尊は釋迦阿弥陀の二尊立像にして發遣来迎の相をあらはせり念仏堂には法然上人の影を安置す中門の額は後柏原院の宸筆にして（往古の額は道風の筆にして二尊教院）小倉山とあり本堂の額二尊教院は後奈良院の宸翰なり（と書して四足門にかゝる総門にありしより霊蛇出て額の文字を掌るといへり為に額の下には不動の像を安置せしかども其後いまだ止ず正信上人の惣の執を救んために念を護り圓頓戒の血脈を授くその蛇忽ち竜女と成仏の證を示しそれより千葉の白蓮花一本生ず池の汀の弁財天の社は當院の什宝として今にあり）當院は後嵯峨天皇并に亀山院の行幸ありし勝地なり（弁才女を勧請しけるなり）此所を去ることあるべしぶに二尊教院と号せりまたなり連綿として其芳躅を其醍醐帝の皇子兼明親

王公がよりの山荘を営雄蔵殿と称す其後星霜をふりて中興法然上人開闢し給ひ元久元年十一月七日一宗模範の式七ヶ條の起請文を制せられ自筆を染て判形をなさる當院第二世信空上人をはじめ西山上人等百八十九人起請に同せらる各自筆に名を書せられたり（熊谷二郎直実も九十人目に名を連ね法名蓮生と書したり）又神変の仏舎利を安置す（法然上人仏舎利につきて式を作りて曰佛子牟尼の遺教によりて浄土の一門を信じ毎日七万遍の念仏を修して既に多年の星霜をつむ然に須惟の語を）いまさのことわりあれ是釈尊の恩徳なりと報謝をなしけるとぞ

足引の御影　其傳に曰月輪禅定殿下法然上人に御帰依の志深く尊敬のあまり上人の真形を写さんと仰ありしに上人かたく辞して退出せらる其後上人召請せられ浴室に入沐浴ありて衣を召し念仏して暫く休息の間西丁法眼宅磨為久をして簾中より密に窺しめ其形相をうつさせらる丈六坐しおはして一方の足先を出されけるがあくまで画に書せり上人帰て後殿下にて寿像を作りかけて開眼供養をぞ望まれ上人謂る此足乃出されは平懐の形なりとて持念せられしに忽然として其足引入り坐

厭離庵
定家卿古跡

せしハ姿よからぬ足偏に上人の奇特又ハ繪師の名誉なりとて人々奇異のおもひをなすしかるに足より足引の御影とぞ称しける

法然上人の第二世正信房湛空ハ徳大寺左大臣實能公の孫にして菩提の真如深秘の志深かりしかバ浄土門に入って當院を再興し土御門院後嵯峨院二代の國師となり寛喜上皇御帰依の勅命によりて御遺骨を當山の御塔に納め奉る當山西のかたにあり三世正覚上人も後深草院亀山院後宇多院伏見院の國師たり當院の縁起ハ伏見宮貞敦親王西三條公條卿の両筆也外題ハ後奈良院の宸翰にして画ハ土佐光信なり大聖文殊の三衣傳教大師の五條袈裟慈覚大師の三衣皇慶阿闍梨の袈裟あり此袈裟ハ護法神現れて天竺無熱池に持て濯ひし之に大原に袈裟石あり具外五鈷等伏見院より御寄附として當院の什寶なり

黄門定家卿の山荘といふ旧地ハ佛殿のうしろの山腹にあり此の卿より以前當院詠歌堂にありしが後世小倉山にありて号する故也定家卿の山荘ハ次下に委し

檀林寺といふハむかし檀林皇后の草創にして嵯峨の御堂と號す唐の義空禅師を開基とす亡廢して其地に浄金剛院を建る今ハ二尊院の塔頭なり
浄金剛院の中に又菩提講式の調すゝ所にて長明神社は二尊院大門の前へ入る所にあり祠ある所は檀林皇后の髪を埋めし所なりとそ檀林とひ待と又日裳宮ハ其南に町ばかりにあり皇后の継嗣をまつるといへり裏柳の社ハ大門の前ありて中院野にあり上衣の散りし所なりとぞ檀林皇后嘉智子ハ嵯峨天皇の寵愛にして西施毛嬙にも劣らぬ美人なり薨じての後戀慕愛執の念をはらひ散させんとの遺命によりて嵯峨野の原に捨置其屍朽ちる所にやしろを建て祭るなり
とぞ
西行法師の庵の跡ハ長のやしろの西にあり
山家集
我ものとく秋の梢をながむ家小倉の里に家居せしより　西行法師
車僧の塚ハ二尊院のまへ藪の中に一堆の所あるむかしよりこれを称ス

京極黄門定家卿の山荘あり是ハ時雨亭と號る舊跡とて殊に名あり
かの卿の詠歌にかゝる文字おゝき圖にありけるにぞ後人これを紙にしるし置りとぞ

後拾遺
いつはりのなき世なりけり神無月誰まことより時雨そめけん　定家

此歌を種として謡曲を作したり　時雨亭も同じ所にて実あるにや　又小倉の山荘といふハ清涼寺西乃門より愛宕山の麓へいたる
二尊院までの道二町ばかりの民家ある所を中院町といふ
中院ありしが今絶て此半をかへ入る細道あり竹林の後ろにかくれ門ありて東に向ふ
所の名とせり
これを厭離庵といふ門の内に柳の水といへる清泉あり草庵乃
後ハ西にあたる所とみえたり　西南ハ高くして砂礫をまじへたり　中頃にて愛宕大善院
の領にして庵室などありしが今ハ破壊して所だに荒廃ありて
禅僧など住めり

新古　黄門此山荘にてよまる
小倉山しぐれの比の朝なくきのふハうすき四方の紅葉ば　定家

続古今
家居の小くらの里に家ゐしてあきぞ雑れ知ぬべかりき　同

風雅
しのばれんものとハなしに小くら山軒端の松ハ馴て久しき　同

明月記　此書ハ黄門かゝりし日次の記なり　家庭訓に曰去嘉元久住吉参籠の時夢に明月記と霊夢ありて
すぞ感し給ひしによりて家風に伝ふとぞ明月記とハ是より名付られしとぞ

彼記に曰　文暦乙未年五月廿七日己未朝天晴　自不知書事　嵯峨中院障子
色紙形故予可書由彼入道懇切雖極見苦事憖染筆送之古来人歌
各一首自天智天皇以来及家隆雅経卿

小倉山百人一首といふハ定家卿の撰にして古今のお仙百人をえらび花実相兼して秀逸なるおのを一人に一首つゝ撰出し給ふ　一説にハ新古今撰集の歌黄門の心に叶ず故に此百首を撰ミ給ふとぞ　又一説に唐の勝子京が岳陽楼に詩賦をきざみけるを入道雅二位の八条の別荘に宗祇法師玄旨法印
お合かくれしたるにや此百首世にも多く弘まりしが宗祇法師
貞徳老人北村季吟圓珠庵契冲など家々の説多くある百人一首に其人の絵姿をかゝるハ
後世の拙なり黄門真筆の色紙にハ作者の名だにかゝれず

為家卿の墓ハ厭離庵の前畠の中にあり此卿ハ中院大納言と称す

続後拾遺
小倉山隠れ家ハむかしもせで岩ねの苔ぞ也やハ古む　為家

玉葉
住そめし昔ありせバ山ふかく心の水を澄さまし　同

定家身まかりて後三年の佛事さがの家にてし侍る時
なかなにもうき身にそへてさらさるハ世にあはれかなくさぞなかるらん　入道前太政大臣
いつはりし人の袖ぬらすらん　為家

下冷泉宗家卿なりしを立らしめ石塔を立てられ
中院入道殿融覚建治元年四月廿九日薨とく記されたり
定家卿為家卿の所父子の旧跡此地に決せり是予が為証とすべし

清凉寺
阿弥陀堂
元智院
八宗論池

方丈
虚空蔵
聖天
歓喜天
本堂
薬師堂
嵯峨帝塔
融大臣塔
観音
五大堂

五臺山清凉寺ハ小倉山の東にあり 俗に釈迦堂と称す
本尊ハ大聖釈迦牟尼佛の立像にして長五尺弐分天竺毘首羯磨天の作なり
脇士ハ十大弟子の立像共に厨子に安置す東西の壇上にハ文殊普賢安置す
抑此尊容ハ三国無双の霊佛にして釈尊在世にうつしまゐらせし生身の尊像
なり如来の御母摩耶夫人釈尊を誕生ましまして後七日に薨じ給ひ忉利
天に生れ給へハ釈尊成道しおハして祇園精舎より彼の天に昇り御母のために説法し
給ふ事一夏九旬の間なり此時四衆の輩釈尊を見奉らずして憂悲する事甚し
然るに優塡王は渇仰のあまり尊形をうつし奉らんとて宝蔵の香木赤
栴檀をえらびて天匠毘首羯磨にあつらへ目連尊者ハ神通を以て佛の容
相をうつしあたへしかバ尊容速に成就して祇園精舎に安置せり釈尊安
居の御法終りて本土に帰りたまへバ其時木像氷精の御階をおりて生身の仏を
迎ひ給ふ釈尊木像に宣ふハ涅槃遠からず末世の衆生を化度あらん
べしと共にあゆみて祇園精舎に入り給ふ当寺の本尊是なり唐土に渡て

宋の代に至りて本朝一条院の御宇永延元年南都東大寺の沙門法橋奝然
入宋して霊告を蒙りて此尊像を感得し奉り帰帆し同二年八月十八日
天聴に達し伽藍を建立し清凉寺と號す 以上縁起の大意

阿弥陀堂 棲霞寺と號す嵯峨帝の皇子融大臣の営みし棲霞観の旧跡なり
本尊ハ阿弥陀観音勢至の三尊なり嵯峨帝の離宮ありし時化人来てこれを彫刻を造り終りて西の方に去る此故に化人と號す 本尊ハ弘法大師の作なり
五大堂 宗旨真言にして本尊ハ五大尊なり中尊ハ二尊同体にして不動大威徳軍荼利の三尊を安置す
二重塔 本尊ハ多宝佛を安置す
三石塔 五大堂の前にあり嵯峨天皇檀林皇后融大臣の三塔なり
八宗論池 弘法大師此池の汀にて諸宗の僧と対論し給ひし所なり
指掛松 池の傍にあり嵯峨天皇御遺詔によりて御[illegible]
四ツ足門 西の門をいふむかし本堂建立の時七日参籠せる人あり[illegible]
くけしとぞ 霊夢の告に日没ら又ハ今[illegible]
牛とうまれり追善を修して佛果を得せしめんとありしが三月十九日命終りけれバ其
にあひ[illegible]して其牛を[illegible]如来の御肌を拭ひ又牛の骸をうづみ此門の
下に葬る[illegible]四ツ足門といふ又其牛の皮をもて如来の華鬘を作ると云
当寺の大念仏 毎年三月六日より十五日まで 円覚上人はじめ給ふ
什物 御身拭 三月十九日本尊を拭ひ奉る[illegible]

詠古
鷲の山二たび到るそ[illegible]の月　寂蓮法師

大澤の池ハ遍照寺の艮にあり菊が嶋とて池の中嶋に天神のやしろあり
此所ハ天神臨降ありしところともいふ　庭湖石　此ところ池中にありむかし嵯峨院ありし時巨勢金岡が建しとぞ

新後拾遺
大澤の池のけしきハふりにけりかはらずすめる秋の夜の月　後京

まま
大沢の池の玉ものみくれにハ螢飛なり五月雨の頃　康光

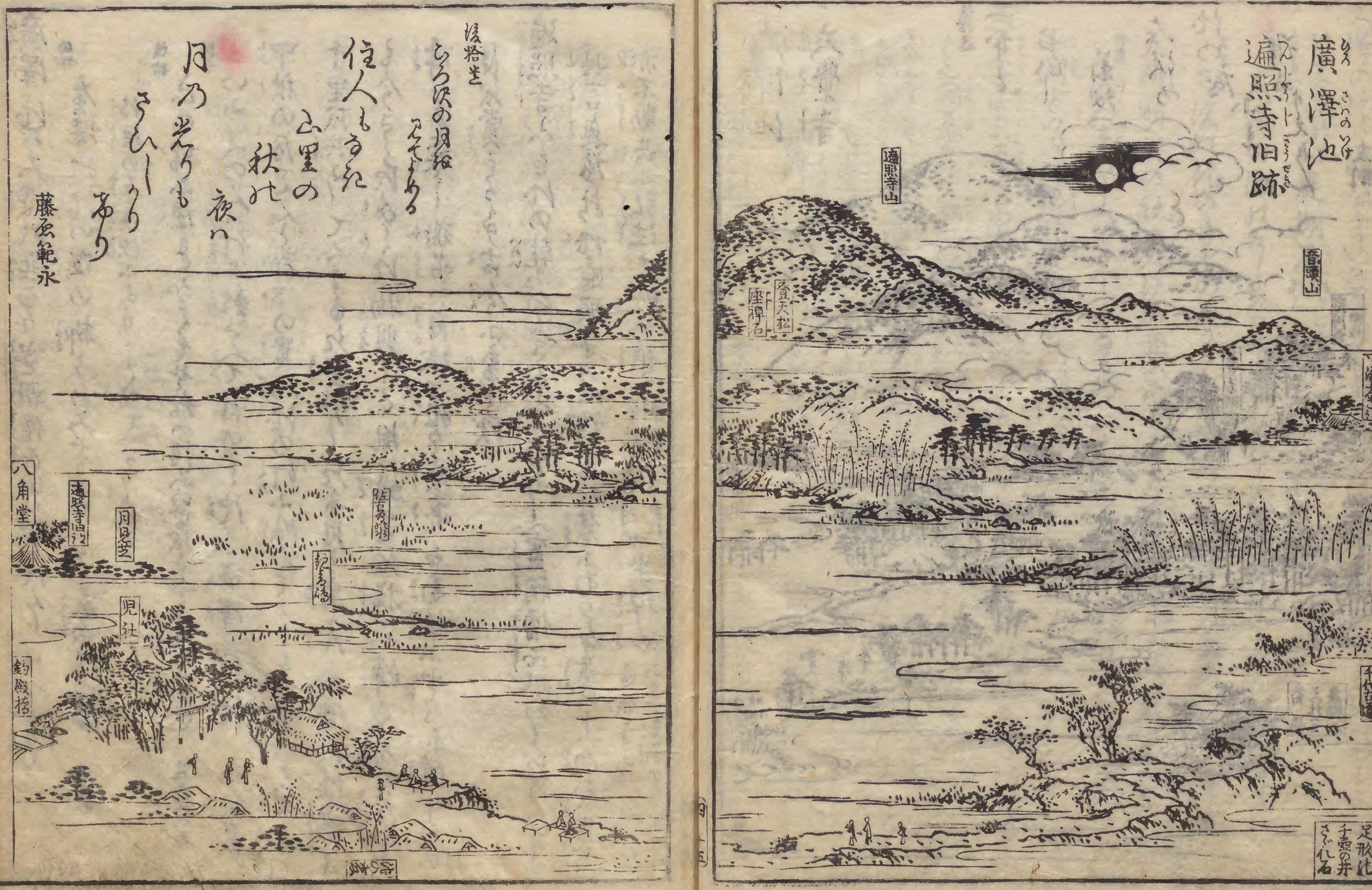
五所明神の社ハ大沢の西にあり名古曽瀧ハ其北にあり　むかし此地に嵯峨殿のありし時兼好が家集にもみえたり

拾遺
瀧の音ハたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ　大納言

小渕といふハ桜の雙樹あり　今ハ人家多し

大覚寺宮ハ真言宗にて仏殿には五大尊を本尊とし弘法大師の作なり　開基ハ恒寂法師　淳和帝第三皇子なり　代々法親王御住職しの人　嵯峨天皇の故宮を精舎として大覚寺と号す　三代実録にみえたり　菖蒲谷といふハ大覚寺の北にあり　小松中将惟盛卿の君達六代御前の方姉君など此ところに忍んでおはせし所なり　八角堂ハ大澤の西にあり後宇多院の陵なり　内に五輪の石塔あり昔ハ堂の形八角なり今も其ハ名をよぶ　相澤池　広沢大沢の中にあり　長刀坂　其北にあり　僧正遍照の旧跡　此所にありしと古書に見えたり

新続古今
名高き秋のさかりの庵のねにふかし涼きこゑぞさかりし　忠定


廣澤池
遍照寺旧跡
後拾遺
ひろ沢の月を見てよめる
住人もなき山里の秋の夜ハ月乃光もさびしかりけり
藤原範永
遍照寺山
登天松
座禅石
八角堂
遍照寺旧跡
月見芝
児社
釣殿橋
千代古道
足形池
さゞれ石

廣澤池ハ大澤共云り寛朝僧正此池をほらしめ給ふとぞ

風雅
廣澤の池の堤の柳かげみどりもふかく春雨ぞふる　為家

後拾
住持の尼廣沢にまかりてよみ侍りける
山の端にかくれもなくて秋の月は昔の世にも宿りけらし　藤原範永

新千
いにしへの人は汀に影たえて月のみすめる廣澤の池　源三位頼政

中秋の月見んと都下の貴紳池の汀に臨んでよもすがら盃をめぐらし千里皆共にみちてくまなき空はるかに月も宿りて廣澤の池に映じも今さらにおもはれ物哀しく風は繊雲を掃ひ浄く宵は月明に澄て寒し謝荘は月賦を作り庾亮も南楼に登る和漢中秋の月を賞せしも今に変る事なし

遍照寺山を池の乾に向ひてありむかし寛朝僧正此山に寺を開く真言宗遍照寺の旧跡は山の麓にあり本尊は十一面観世音
赤不動共に弘法大師の作　今池の裏村の寺にあり
坐禅石　遍照寺山の中腹にあり寛朝の坐禅し

ありし　圓の山　はしさく山の續にあり池の汀よりみゆる
所也　登天松　寛朝此松の梢より天に登りしといふ　佐古曾の水　池の西のくくに
してあり　観音嶋　池の乾にありいにしへ遍照寺より見のやしろ　池の西方の
此嶋に橋ありて観音堂あり　傍にあり
寛朝僧正の常に儀みて仕へし児童あり寛朝登天の後　児ケ石　坐禅石の
悲しんで終に此池水に身を投て死す其霊石となる　下にあり
あり寛朝坐禅のうへ児童此石に頭をもたせて眠るとなん　釣殿　池のやしろの傍池の汀にあり
釣殿橋　池のほとりの　児童の霊此所に現しとぞ
大道法師足形池　広沢の東にあり　屏風岩　広沢より
鳴瀧に至る　青頭山　足形池のほとりの　千壺の井　其所に数多く井あり
此山にあり　鳴瀧道のちかく
不意にて此山に入るとさゞれ石　南の山にあり
井に[illegible]
千代の古道　広沢の西より常盤へ通ふ細道あり
千代の古道は西に名所にあらざるよし名所の歌書にせしかり
嵯峨に定家卿為家卿をはじめ後撰の歌合に古歌の詞も定あり
ある名所にあらざるにても其満ある沢
帯かり池　広沢の西のにしになる所あり昔むかしは
いと深くて此池の霊帯と化して人をなやましとぞ
志のぶが岳　的野　仏翁洞　野依　此辺にありよし其所さだかならず
遊草里　遍照寺の西なり東　今八軒といふ　土器つくり住む其人の氏を遊草といふとぞ

新古今
下紅葉かつちる山の夕しくれぬれてやひとり鹿の鳴らん
家隆

條峯五老勢相連
此鹿来従碧澗邊
有野麋人不見
一生長飲白雲泉
賈島

嵯峨野ハ大覚寺清凉寺此あたりを上嵯峨といひ天龍寺法輪寺此
辺を下嵯峨とよべく野々宮は其中途なりいにしへより閑静の地ゆ
して故人も多くすみたまひ秀詠和歌数多残し源順も此
地に住んで紫藤の賦を作り楼臺空く僧侶の宿となりぬる所彼紀
しは文粹にの世たり古へは舊野山とも田猟の地あつて嵯峨帝始
て御狩ありしより文徳清和陽成の三帝はおはしませしめひ
しが光孝帝かさねて興しあひ御幸ありぬあるひは此野へ殿人
を遣されて松虫鈴虫をとらせ給ひし其ころは野に虫屋ありて
造り籠まで虫を撰み奉るる嵯峨帝は無双の御能書にして
日本三筆の第一なり又詩文にも達し給へる文華秀麗
にありより御位を淳和帝に譲らせ給ひて嵯峨の離宮に
かくれ嵐山の白櫻亀緒の落月に叡慮を慰めさせ給ひかの
世捨人も此野の女郎花の色にめでて落ちかかり馬より落て

よめる

古今序
名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちきと人にかたるな　僧正遍照

玉葉
めかりへの草の袂にしもあへぬ秋の嵯峨野の四方の白露　順徳院

長久二年八月松尾社行幸侍りし時上東門院の女房車
に草の花をかざして嵯峨野にさぶらふ人に立ちならぶ人で物見
侍りし紀伊の遊ぶ事のかくさぶらひそ侍りけるが落乃
車のうちにうちよせてよみ侍りける

後古
うちすてゝ（○）くるしきあまる花落ては色がくてえる嵯峨の野べ哉　中納言資信

新千
絶せじな後れさりつ末をとくとくの流石の流れはすむらん　亀山院

同
うらむらむ此世のさかれ秋の露も時雨もそむらん　法下定為

嵯峨十景

難瀬飛瀑　五臺晨鐘　仙翁変浪

遍昭孤松　幡山霊社　亀緒落月

叡岳晴雪　愛宕雲樹　嵐嶺白櫻　雄藏紅楓

野宮は小倉山の麓なる薮の中にあり悠紀主基の両宮ありて神明を祭る黒木の鳥井小芝墻はいにしへの遺風なり伊勢太神宮へ斎宮に立せ給ふ内親王此所にて三とせが程住せ給ひて潔斎し給ふ斎宮のさだめは垂仁天皇の御宇皇女倭姫命より始り野の宮は別れたり

例によりて九月上旬吉日を卜定して伊勢太神宮へ向ひ給ふとぞ後鳥羽院の御宇に此事絶ぬ

拾遺 斎宮の庚申し侍りけるに松風入夜琴といふ題をよみ侍りける

琴のねに峰の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん　斎宮女御

日

松風の音に乱るゝ琴の音をひけば子日の心ちこそすれ　仝

続古 雪のあした野の宮にて

榊さへ末のかれ葉のかげにふりけそふる雪は白ゆふ　入道前太政大臣

玉葉 神風より出ゆくとて

すゞか川八十瀬の波は分もせで渡らぬ袖のぬるゝ頃かな　契子内親王

常寂寺は野宮の西にあり法華宗なり開基は日禎上人なり本尊は釈迦多宝の二仏を安置す定家卿の社は南の山上にあり此所も彼卿の山荘なり

これなる念院より小督局に偶し車琴といへる名琴あり後代にいたりて金吾秀秋の手にありしを当寺に寄附せしなり

野々宮

常寂光寺

芹川ハ野宮のあたりを流れ末ハ大井河に落る小川なりむかし芹川殿といふ御所あり亀山院御幸ありし所とぞ 芹川当国の中に二ヶ所あり和歌ハ相同し

伏田の芹川ハ 旅を

歌詰橋ハ天龍寺のまへ芹川の流れにかゝる橋なり西行法師此所を通りたまひしがある奇童に逢て和歌の贈答数首ありし後に西行返答につまりしより號るとぞ

薄馬場ハ天龍寺の東鹿王院のうしろにあり いにしへ橘氏薄殿これに住れ 今ハ辻子といふ

亀山ハ天龍寺の西なる山也 號る 亀の甲に似るゆへ後嵯峨帝亀山帝

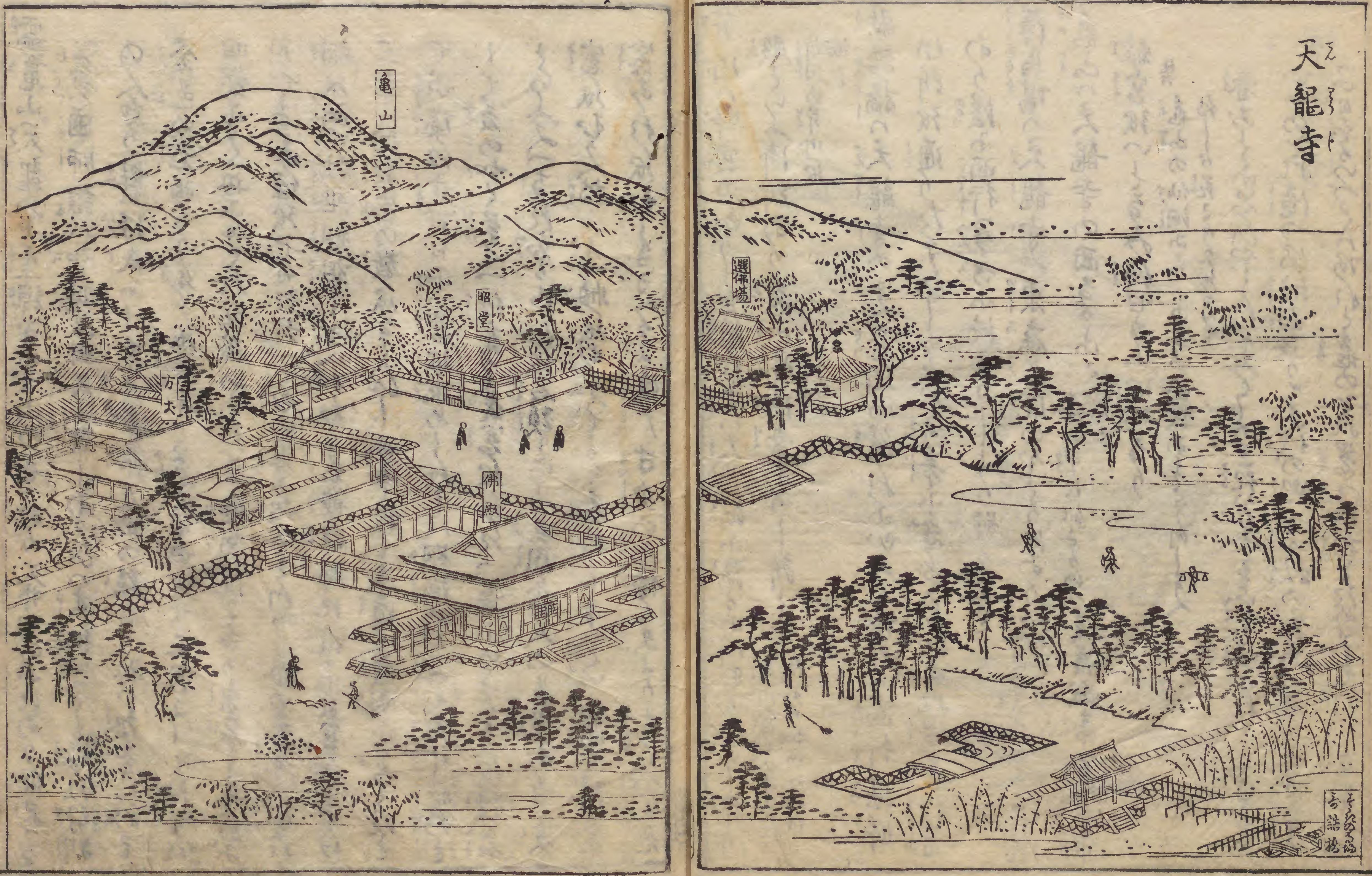
離宮ハいとなみ住せ給ひ旧跡なり

詞書 亀山の仙洞によしのゝ山の桜をあまたうつし植侍しが花さかりを詠て

春ごとに思ひやられしみよしのゝ花ハけふこそ宿に咲けれ　太上天皇

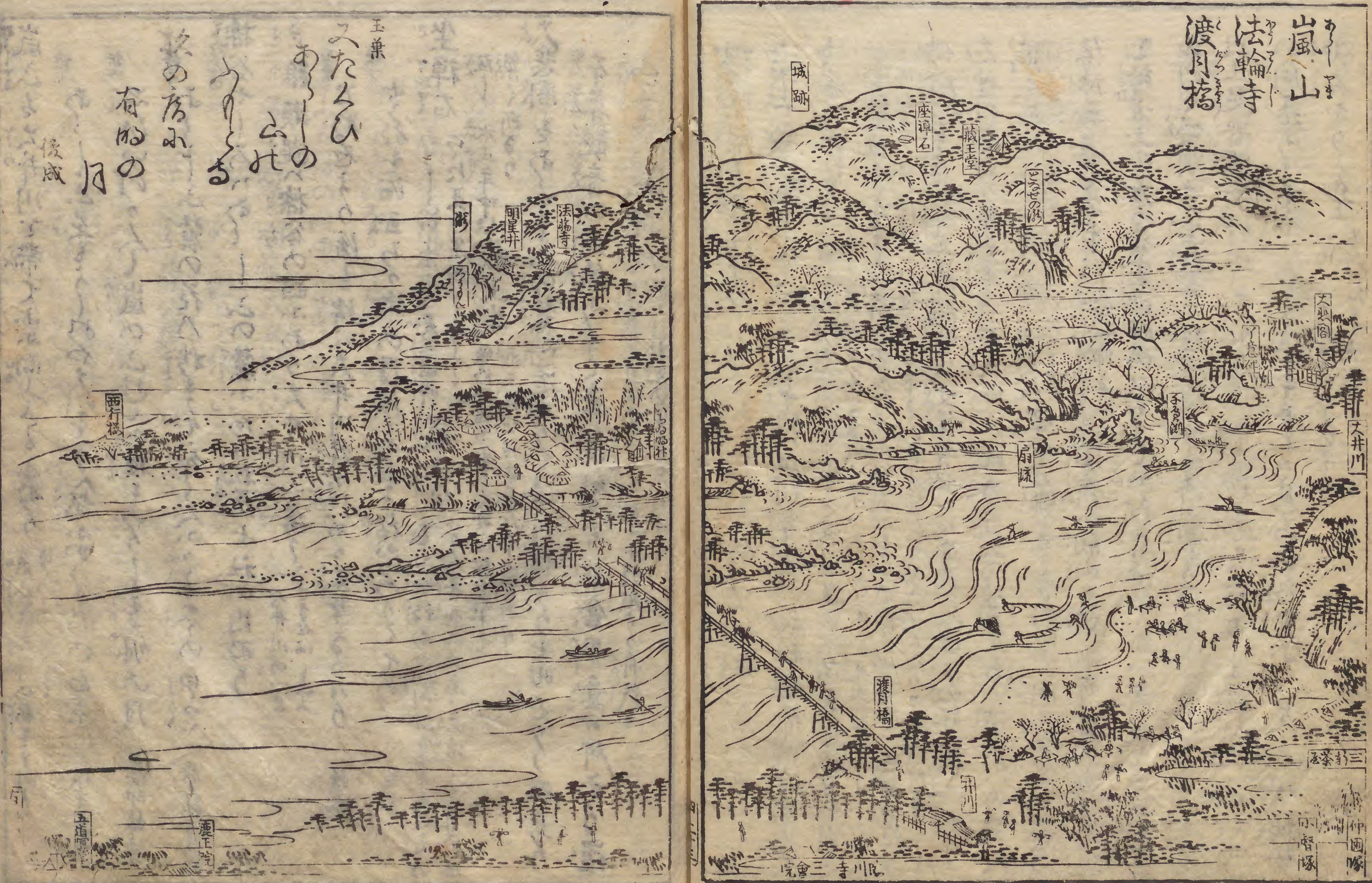
かめのをの滝つ岩波ちりて千代の数ふる秋の夜乃月　大納言通成

新千 子日するひづくハいづれと亀のをの岩ねの松をためしにそ引　為家


天龍寺
亀山
昭堂
方丈
佛殿
選佛場

霊亀山天龍資聖禅寺は五山の第一なり大井川のほとりにあり開基は
夢窓国師諱は智曤又疎石と號しまゐらす初は本納(?)ものせ勢州
の人なり姓は源氏にして宇多帝九世の孫なり母は観音に祈りて
金色の光西より来りて呑むと夢みて妊し十三月にして誕生す
四歳にして母におくれ九歳のとき平塩教院に至り出家し十歳に
して法華経を七日に誦し母の恩に報ずとて母の死屍九変れ
相を画て独坐観想し十八にて慈観律師に禮し具足戒をうけ
三年ほど顕密の教をまなびしがつひに大道の發明に至らずと
て道場を建百日聖感を求められし期満の日忽ち夢中悦惚と
して夢の如く異人一僧来て夢窓を引て一寺にいたる疎石
といふ又一寺に至る石頭といふ其寺に一人の長老あり夢
窓をむかへ持くる一軸をあたへてよく奉持しまへといふ覚て後夢
窓と号し疎石を名とす是達磨半身の画像なりこれより志を定め

禅観に帰し名を疎石とあらため字を夢窓といふ観應二年九月三十日
七十七歳にて寂しぬ當寺の本願は足利尊氏公 後醍醐帝追福のために
御建立ありしといふ いにしへは伽藍林なりし荒廃して其後 後嵯峨院亀山院等仙洞をかまへ
よろづの花木を植て宸殿の西には薬州院東には如来寿院をうつす小倉の山
戸離宮龍もさらなり御垣の内に入て画工の筆力にも及びがたし又中書王といひし延喜帝の皇子
兼明親王の名をそ潜居ありし舊跡によりて是亀山の荘に結びし菟裘の賦を作り給ひし所なるべし
佛殿は本尊は釈迦佛脇士には文殊普賢を安置す壇上の牌には天照皇
太神の銘あり梵天王帝釈天達广臨済百丈の像は左右の壇上に安置す
いにしへの佛殿は霊光殿と號す堂
前に其跡あり佛殿はむかしの法堂なり 昭堂は聯芳といひて開山の像尊氏の
像地蔵尊を安置す 法体は尊氏公也 又堂内に開山七朝国師號の勅書七通
を并方丈の庭は夢窓国師の作にして池を曹源池といふ書院を楽隠軒と
なづく塔頭多宝院には後醍醐帝の御廟あり金剛院の開基は夢窓
の上足普明国師にして光厳院帝の御廟あり真乗院は笑山和尚
の開基にして細川常光の茶亭あり其前に手盆あり是亀頂塔の
礎石なりとぞ いにしへ天龍寺に九重の塔あり是を亀頂塔となづく


嵐山
法輪寺
渡月橋
玉葉
みたくひあらしの山れりける夜の床に有明の月
俊成
城跡
座禅石
蔵王堂
扇流
大井川
渡月橋
法輪寺
明星井
西行桜
臨川寺 三會院

嵐山ハ大井川を帯て山に向ひたる山なり　亀山院吉野の桜をうつし植させ給ふ所とそ

新千　あらし山是もよしのやうつすらん桜にかゝる瀧の白糸　後宇多院

新古　なびける人も嵐の山にけさぞかりしる有明の月　法印静賢

続千　あらし山麓の花乃梢まで深くかゝる峯の白雲　前大納言為氏

櫟谷やしろハあらし山の麓にあり松尾七社の内なり

戸難瀬瀧ハ櫟谷の西にあり大井川に落る　大井川の一名をとなせ川ともいふ

玉葉　となせより流す錦ハ大井川筏にせめる木葉なりけり　俊成

続千　岩なみを治玉ちる瀬々の月影にそれかとぞ林にうつりそめける　定家

坐禅石　あらし山の上にあり夢窓国師此石に来り坐禅しおはしまし報して永正年中に緑く所なり

嵐山城　峯に城跡あり細川右京大夫政元の家人香西又六帝え退しとぞ其縁

蔵王谷　嵯峨の西にあり吉野山より移して蔵王権現坂安置今に堂あり

大悲閣ハあらし山の林森に道ありて渡月橋より七町ばかり西なり本尊観音の立像にして恵心の作なり角倉了意の碑あり羅山子志うの撰ん　了意ハ大井川の巌石を截て小丹波より舟筏を通りし林木の運送を自由にせしを

智福山法輪寺ハ渡月橋の南にあり真言宗にして本尊ハ虚空蔵菩薩の坐像なり　道昌法師の作　脇士ハ明星天子雨宝童子なり

続千　更行ハ鐘のひゞきも嵐山寺にこえてきこゆる月の影　高道

当寺ハ天平年中に建立にして葛井寺といふ　天慶の比空也上人こゝに住て舊寺を修造し念仏の行堂とせし

中興の開基ハ道昌僧都姓ハ秦氏にして讃州香河郡の人也弘法大師に真言の密法をうけ虚空蔵求聞持の法を修せんとて此寺に一百日参籠しける五月の比皓月西山に傾き明星東天に出る時閼伽の水を汲けるに光炎頭に耀て明星天子袖のうちに来現し忽虚空蔵菩薩と現じ給ふ縫のごとく漆のごとく数日を経といへども其體滅せず是生身の尊容なりとて道昌則虚空蔵菩薩の像を刻み袖の像を腹内にをさめ其比弘法大師を請じて開眼供養しける是当寺の本尊也貞観十六年に阿弥陀堂を改て法輪寺と号す

落星井　又明星井ともいふ本堂の南にあり井のうへに社を建て明星天子をまつる道昌此井にて垢離しけるに星のかげうつるとなり

参籠堂　本堂にあり智福を祈る近年都の士職人此所に籠て一七日断食して大に垢離し断食いまだつゞまれど

東橋　橋の門のまへにかゝる橋をいふ

古今
はなざかりに京を
見やりてよめる
見わたせば
柳桜を
こきまぜて
都ぞ春の
錦なりける
そせい法師
骸骨のうへを粧て
花見かな
鬼貫

大堰川の水上ハ小丹波より流れて水尾川清滝川に落合ひ猿飛龍門瀧
大瀬等の名ありておかしき所を帯して渡月橋へ至り末ハ梅津桂の里
のそばを流れて淀川に落る

新古今　延喜の御ときに大井川に行幸侍りける日
かげさへに今ハと菊のうつろふハ波の底にも霜やおくらん　坂上是則

拾遺　大井河川辺の松にこととはんかゝる御幸やありしむかしも　貫之

は　色々の木葉ながるゝ大井川しもハかつらの紅葉とやみん　忠岑

此河の流れハ清流に清らかにして千代に一度すむ水の黄河にハ引かへ下に
筏のかよひあるハ遠近の騒人扁舟にうかみ棹さしめぐりて是の岸より岩
間によせ来るとゞめぬ水のおもしろさ花の朝ハ浅瀬に瞰して繒を盛る
あり水上に踊る若鮎の鉤を争ふて牽動せる楽しみに石ぶしつる所へハ網を
おろして夜に入るまでも猶あかず凛々たる河風に暑を忘れ弥増の興に乗じて
月に歩し帰るも多し續文粋にハ天下の勝地ハ大堰川に過ぐるハなし
城中の名邑ハ嵯峨野にしくハなしとあり右大臣師房卿も宣ひし之

渡月橋ハ大井川にありて法輪寺へ渡る橋なり一名を御幸橋法輪寺
橋ともいふ

風雅　大井河霞りてみゆる橋の上にゆく人さびし雨の夕ぐれ　前大納言為業

小督桜ハ大井河の北二軒茶屋の東藪の中にあり小督局ハ桜町中納言
成範卿の女禁中一の美人にてことに琴の上手なり高倉院の御寵愛妃
なりしが平相国清盛に恐れて此嵯峨野に隠る弾正仲国ハ勅を蒙りて
寮の御馬に打乗りて明月に鞭をあげ西をさしてぞあゆませける折しも此
山里と詠じたまひし秋の夜の空にて哀にこと寂しくめぐりしに
亀山のあたり近く松の下むらあるに幽に琴の音聞へぬれハ仲国さてこそ
と嬉しく門をたゝき入て御文をまいらす軈て御返事給ひて
帰り参りしに主上ハ夜すがら御座にまたせ給ひける　くハしくハ平家物語にあり
千鳥淵ハ小督桜の西弐町ばかりに巖あり　むかしの身投石といふ　淵ハ南の岸のほとりなり
横笛ハ滝口に離れて此所に身を沈め盛衰記にくハしく　平家物語にハこれに遠きとあるべくなり

西行桜 法輪寺の南にあり西行法師此所に住て桜を愛し詠し今の澄心院は其庵室の旧跡なり 西行田とて字田地此辺にあり宗祇法師も住けるとなり遺跡あり

霊亀山臨川寺は渡月橋の北にあり禅家十刹の第二なり

三會院は本尊は弥勒仏にして坐像なり仏殿の額 三會院 足利義満公の筆

もとは此地は旧亀山法皇の仙居にして建武二年十月後醍醐天皇より開山夢窓国師に賜ふ 当寺の庭を夢窓の作なり

鹿王院は臨川寺の東にあり禅宗にして十刹の第一仏殿の本尊は釈迦仏脇士に十六羅漢を安置す運慶の作 開基普明国師の像尊氏公の像は右の壇上に安置す当寺の本願は将軍義満公にして至徳元年に建立なり什宝に仏舎利あり 伝に曰鎌倉将軍実朝公の霊夢によりて宋国へ勅して仏舎利を伝来し相州の大慈寺に安置す後光厳院帝の御宇夢窓国師に勅して禁裏に納り其後夢窓の弟子普明国師に賜ふ今当寺にあり毎年十月十五日舎利会を修す

車折社は下嵯峨材木町にあり 五道冥官降臨の地なりとぞ一説には清原真人頼業の霊廟といふ むかし此所を車にて行く人あり忽牛倒れ車の轅折れしとぞ今は遠近の商家売買の価の約を遂るために此所に来りて祈る其所願成就すれば此社に小石を取り帰りて家に神として崇め備物の附件の石に倍して此所に納めん五道冥官炎魔王宮の庁に出て諸願を記し金札鉄札をもって遂るとなん当社の風俗なり

有栖川 小川なり 材木町の北にありて北より流て 斎宮 有栖川の辺りに人家の御跡あり

千載 千早振いつきの宮の有栖川松とともにぞかげはすむべき 京極前太政官

帷子辻 材木町の東にあり上嵯峨下嵯峨太秦常盤広沢愛宕等の別れ路なり帷子辻といふは檀林皇后の骸骨を野に捨しとき帷子の散りし所也

安堵橋 帷子辻の西にありむかし清涼寺の釈迦火災に及ぶ時旃檀の香比叡山に薫る大衆大ひに驚て嵯峨に奔る此所にて尊容に過ふ安堵しければ安堵と名付る是より名づけ初しとぞ

甲塚 安堵橋の左にありむかし火の雨ふりし時此塚に人かくれ遁るとぞ中に石窟あり

油掛地蔵 橋の西にあり往人油をかけて祈る

常盤杜 辻より西にあり杜の下に石仏の阿弥陀仏を安置す

乙子地蔵 杜の西にあり六地蔵巡りの其一なり 毎年七月廿四日地蔵会あり

常盤墓 地蔵堂の傍源義朝の妾にして牛若丸の母常盤御前此里の人なり 名とも里人此所に墳を築く

拾遺 紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれ鳴てや秋を知るらん 能宣

新古 秋をとて誰も聲する常盤の山里は住む人さへや面がはりせぬ 忠定

玉葉 染かぬる時はの杜の梢より秋の色とは見えずなりけれ 皇太后宮大夫

新後 秋風の吹くとき常盤の杜の梢染ぬまも秋を見たれ 定家

古御所 常盤の東にあり八条女院此所に住給ふ御室の常盤殿と称す

藤木 杜の東にあり梅本紀伊守旧跡なり

太秦
廣隆寺
太子堂
桂宮院
三社
方丈
稲積社
弁天
祖師堂

九月十二日
太秦牛祭

聖徳太子はじめて執行ひたまひ祭文ハ弘法大師の作りてたまへるといひ傳へ侍る

太秦廣隆寺ハ洛陽二條通の西にあり　太秦ハ里の名なれども應神天皇の御宇秦人日本に來り蠶をやしなひ機織をよく
み帛綿をたくはへ人々の膚をあたゝめ侍りぬ故に膚を秦と訓じて氏を賜り天皇
ふかく賞しめ給ひ此地をくだしたまひぬ秦氏則秦始皇の廟を建てならひ太乃字
をくはへて太秦と當寺のなづけたまふ推古天皇十二年八月に大和國斑鳩宮にて
訓なるなり
聖徳太子近侍秦川勝を召て宣ひけるハ我此夜夢みる事あり是より西北の方に
一村あり楓林繁茂し楮香常に薫ず林中に大なる朽木あり無量の賢聖
諸經の要文を誦しあるひハ天童妙花を供して木より光を放微妙の聲
ありて妙法を演る今より彼地に往ん川勝ハ則駕をめぐらして前駈す其日
葛野の大堰に臨んで見れどもいまだ見えざりし楓林の中に大なる桂樹あり
異香薫じ其樹の空虚に奇瑞の寶容ありて光明赫々として蜂多く集り
聲を發し随身去る者を拂ども盡ず凡人ハ蜂とみれども太子ハ賢聖とみそ
なはしけれバ則假宮を蜂岡のもとに造て川勝に勅し百濟よりきたる佛像
を安置し玉ひて蜂岡寺といふ　後に廣隆寺と改む廣隆ハ川勝の名也以上傳記の大意
本堂の藥師如來ハ向日明神の御作也傳に曰山州乙訓郡向日明神乃

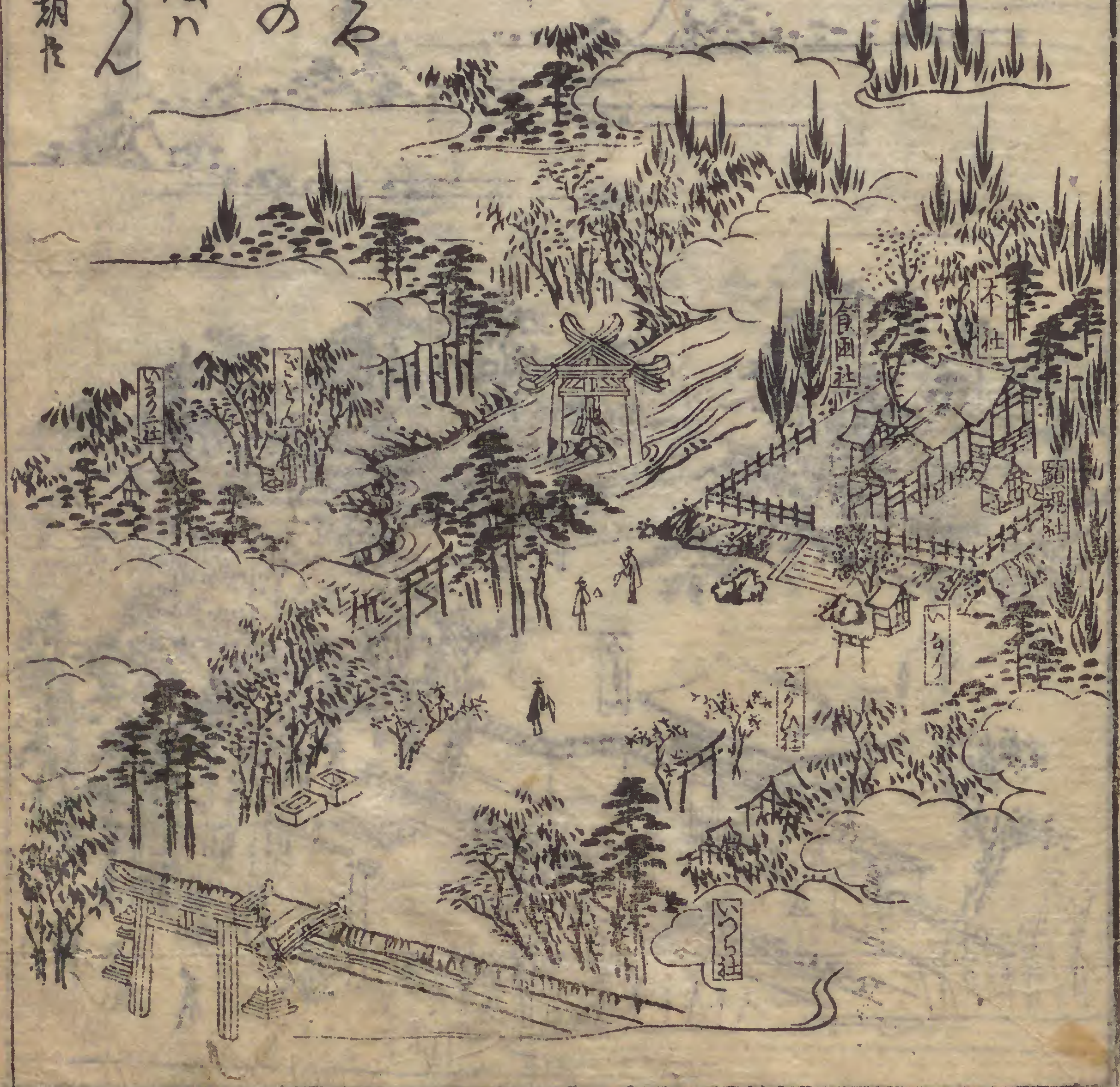
社前に櫟木あり寛巳の年を歴たるを伐んとせしに一日異人來て此を伐て
佛像を造り南無醫王尊藥師佛と稱し忽神殿に入てみえず衆人是を傳
聴て集れるに志あるもの霊驗ありて耳目を驚すに曰郡太秦寺に　日本後紀延暦十三年十二月乙訓社の佛像を太秦寺に
遷に智威法師といふ人唐より來て居住す社司等此の傍にありて人々これ都鄙
袖をつらね群詣し感應はなはだ新なり智威没して後丹後國石作寺に
うつし其後清和天皇勅して當寺の本尊となし給ふ　侍醫に侍從吉の本尊のよし此縁起を載る源平盛衰記にあり
太子堂に聖徳王御自作の卅三歳の像を安置し代々の天子より黄櫨染の御袍
御下襲表袴御内着石帯等を毎歳贈進す　今に至まで一千弐百年に及絶ることなし付寶守屋退治の軍配團あり矢除の團と稱す
地藏堂　金堂の西にあり地蔵尊ハ道昌大僧正の作なり　鎮守社　三十八所の神を祭る　閼伽井　伊佐羅井とも
池のあらましにあり此池へ紅蓮白蓮石燈籠　太子堂の前にあり此を太秦形と賞美ん
炎暑の節盛を見て觀す　古風を慕ひて模形とするなり
土用塚　太子經王を收し所と云り　太子堂の西道の中央にあり　大酒明神　祭神一説に秦始皇を祭る　天照大神八幡宮天満天神を
もとハ秦川勝の　桂宮院　太子堂の西一町ばかりにあり八角堂と稱す推古
霊を祭るともいふ　天皇十二年太子自土木の功を構へ堅く築造のよし
所なり堂内に三躰の本尊を安置す二臂如意輪觀音ハ太子の御作也阿弥陀佛ハ
隋煬帝より推古天皇へ送り給ふ本尊也聖徳太子の像ハ御自作にて坐像なり

木嶋社

新勅撰

ながしみる このしまの やしろ 白砂の 雪にまがへる 波ぞ立らん

後撰胡院



祖師堂 金堂の西南にあり中央弘法大師右ハ理源大師南ハ道昌大僧正の像を安置す又此の洞にハ如意輪観音を安置す毎歳九月十二日庚戌の辰に牛祭の神事あり當るの僧侶五人又大尊の形に表し異形の面をかけ風流の冠を着し太刀を佩き一人ハ幣を持て牛に乗四人を前後に囲従者ハ松明をかゝげ行列魏々として本堂の傍より後へ巡り又西のかたより祖師堂のおもて壇上にのぼり祭文を読む其文法古代の法を知る述る甚だ奇なりして法人耳を驚かすことなりとぞ

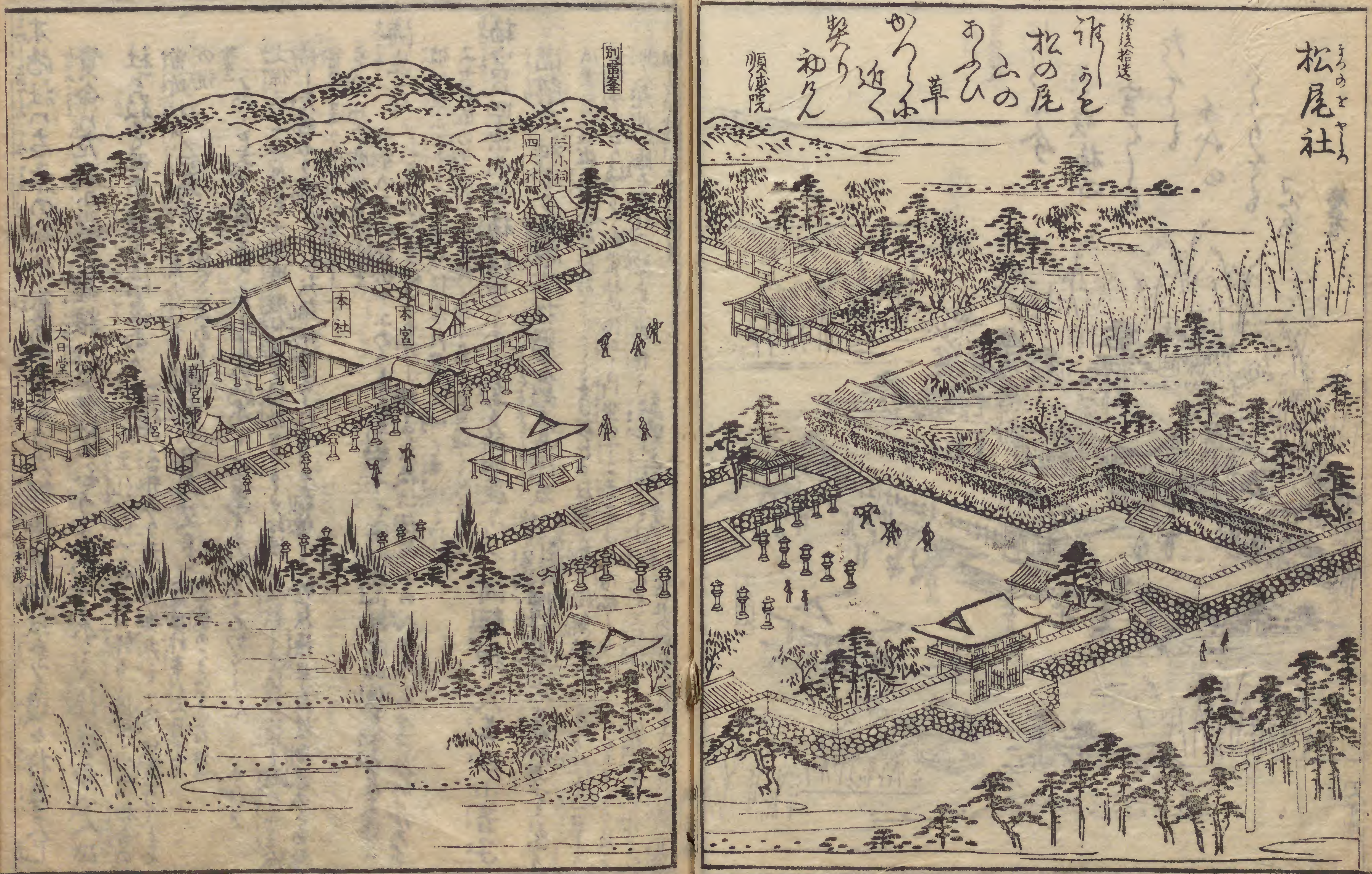
祭文

夫以姓は乾坤の氣にうけ徳を陰陽の間に保信を専にして佛につかへ法をとうとびて神を敬ふ天尊地卑の禮をたゞして是非得失の品を弁ゆる是偏に神明の廣恩之周慈卑微の幣帛をさゝげ敬して摩吒羅神に奉る上は豈神の恩を蒙らざらんや是によりて四番の大衆に等一心懇切を抽て十抄の儀式をまなび諸人の逸興を催にをいて神の加護神明の法楽に供へ法衆の感歎をうたがふべく暗に神の納受をかうむらん然間さいづち頭に木冠を載くゞひ足に舊鼻高をはきはけ牛に乗て殿を遶大面をかけむもあやさ馬に鞍をはけて押ゆるもあり乘るもあり偏に百鬼夜行に異ならず次に如是等の振舞を叫く摩吒羅神を敬祭しまつるうへに天下安穏寺家安泰のためなり因を永く遠く攘ひ退くべきものは先ハ三面の僧坊の中に志のび入て物をとる盗人あり奇怪といふべし小童どもを木々のあたりのえんにぞあり障子を破くもの法師頭もおそらくぞ立ゆる或ハあさ眼疾病をはづき疔瘡よりうけ癇風ともいへば鹿瘡出うき濃瘡あるを瘡をかに向へる大あくびを並にひだいらひ病鼻ふりたるかん地見たちさり傳屍病なれまへだ鐘樓法華堂のかどかどばかり讒言仲人いさかひ合の中方言貪苦男の入たる無縁女の隣あり又ハ堂塔の檜は喰ひぬく大鳥小鳥が聖教やぶる大鼠小鼠が田の畦ゆる内ところをわれがもちの女原まで共に永く老く根の國そこの國まで退ひ去りそくべきものゝよし敬白謹上再拝

地藏堂 弘法大師の作なり

古枯社 太秦の南にあり向日明神此地へ影向しゆふ槻木の靈をまつる

うめのみや
梅宮
東山
本社
若宮
新後拾遺
慶有


松尾社（まつのをやしろ）
続後拾遺
誰しかも松の尾山のあふひ草かつらに近く契り初けん
順徳院
別雷峯
四大神
三ノ小祠
本社
本宮
大日堂
新宮
十禅寺
二ノ宮
舎利殿

木嶋社ハ太秦の西北森の中にあり天照御魂神を祭る瓊々杵尊大己
貴命ハ左右に坐す蠶養社ハ本社の東のかたにあり京ちかき所の人此
社を敬ふ西の傍に清泉あり　世の人元糺といふ名義ハ詳ならず池中に三ッ組合の石柱の鳥居あり老人の安産とぞ姿をあらはせしとかや
當所社司　石鳥居　八角の柱あり森の入口にあり　例祭ハ九月廿八日也　蠶養社事ハ二月十一日　名残のまつりハ六月廿日
の説
拾遺　おもしろく舟もかよはぬ木の嶋にいかであまのまをかけけん
文保三年四月若士伊時遊仙窟を傳授せらるゝ所源く歎息して此社に詣る林中に草家を
結し老翁あり常にさゝげ所誦伊時ちかく至りて相傳し一帙を讀畢り後報恩のため玉
寶を送りふかれて居らず
是當社の應現なりとぞ
海生寺　太秦の南竹林の中にあり今ハ草庵にして開山源山禅師の像を安置す木像は
破れ車に乗して三人ぞくり倚子に死し挪子を拾ひ此僧何ゝきの姓の人とらするを知る
又七百歳の年歴のなを故に名を七百歳とも称せらる
梅宮ハ四条の西梅津里にあり祭る所四座にして酒解神　大若子　小若子
酒解子神なり相殿にハ橘贈太政大臣清友　諸兄公孫　奈良麿子　檀林皇后嘉智子をならぶ
此皇后ハ嵯峨天皇の愛妃なりしが御子おはせざるを常に愁て酒解神に祈りありて懐胎あり
て妊身しるしあり則當社の清砂を御坐の下にまきて安産し給ふ仁明天皇是なり故に
世人産月に臨む當社の砂を取て帯操にする　熊野三所新向石　紀州三熊野より三ッの烏を遷して化せらる
佩る此遺風なりとぞ　當社の例祭ハ四月上ノ申日神輿二基

梅津川　大井川の流なり此所に船渡しあり　山田渡しといふ桜本所南に武家也　長福寺　東梅津にあり禅宗にして開基ハ大炊御門太政大臣北輪といふ花園院の御孫なり
咲ぬれば梅津の川の花さかり川瀬のかげもしるくなりけり　為家
春日社住吉社　西院村にあり此所の氏神にして祭ハ九月九日神輿三基にて春日住吉之里　野宮　西院の西道の南にあり嵯峨とは別にして斎宮の皇女潔斎の地なり
松尾社ハ梅津の西にあり　別雷山ハ社のうしろの山なり當社の明神の降臨の地なり松尾山ともいふ
後拾遺　一条院の御時はじめて松尾行幸侍りけるにうたふべき歌つかうまつりけるに
ちはやぶる松の尾山のかげ見ればけふぞ千とせのはじめなりける　源兼澄
本社に祭る所二座にして大山咋神市杵嶋姫命なり　神秘　大宝元年に秦都
理といふ人社殿を建て分土山より遷し奉る　鎮座記には元明帝和銅二年四月十一日始て加茂より山城国山田荒子に示給へとかや
茂の丹塗の矢化して松尾の神と現ず是則秦良兼
同正光松尾の守護とする今の社司の遠祖なり　松尾七社　月読社　櫟谷社　三の宮　宗像社　衣手社　四大神
當本社の傍にあり仁明帝承和四年に始る神輿七基西七條の御旅所に桂川を舟
渡しにて送れ奉る八月朔日には鳥井の傍にて相撲あり京方官職方とて東西に列して
四月八月松尾祭往古はそく御祭にこれありしとぞ上卿の為なれば祭りしも郷民の所なれば
時為さもあらむ神輿ときて我さゝぐ名のりせしとや
舎利殿　本社の南にありいにしへ此所に大木の杉あり谷堂の延朗上人の日早くこれと
より銅塔を建て舎利を盛りて人寿の延ることを祈り神官等伐させし杉の木の中に
延朗の言を信じ三層塔を建てられ安置し　後源兼院　お猪内樹

明智坊石像 松尾社の北一町ばかりにあり明智坊ハ山門の碩徳なり大乱とて律師に任せし山門を退きて此所に閑居し

月讀社ハ松尾の南二町にあり松尾七社の内なり 當社鎮座のはじめハ往昔みして紀歴のまゝ松尾より以前よりありしを齊衡三年三月に山城國葛野郡月讀社を松尾の南に遷されし文徳實録に出たり又文徳帝清宇仁壽二年に疱瘡大に流行して諸人多く死す此附當社の神託ありてその害を救ひ給ひしより貴賤疱瘡の災を免んとて此社に詣で神のたすけを祈る由三代實録にあり

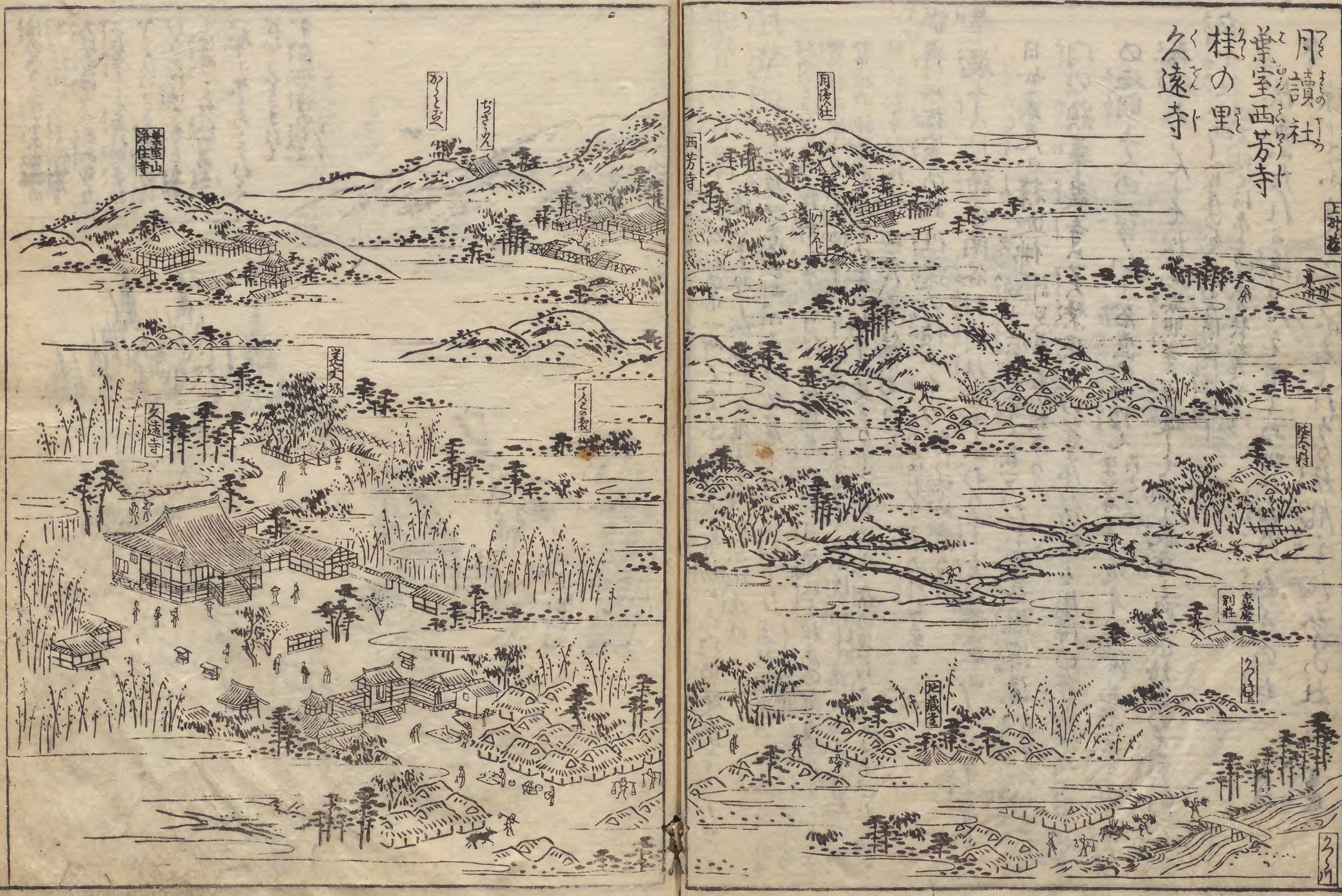
狐齋ハ松室の西住還の傍にあり 小社あり祭の神坂奉る 実ハ狐塚なり

華嚴寺ハ月讀の南谷村竹林の中にあり宗旨ハ華嚴にして本尊ハ大日如來左に釋迦佛 頭に宝冠を戴く長一尺 右に開基鳳潭像 左の手に華嚴経をおし右の手に如意を持 計見華嚴の相なり 門の額華嚴寺ハ黄檗隠元の筆左右の聯ハ鳳潭の筆なり此所ハ最福寺の延朗上人の住せし谷堂の旧跡なり 字を寺家の内といふ 近年鳳潭和尚華嚴宗を再興ありて松尾安照寺を遷して華嚴寺と改め此地に移りて寂す 元文三年正月廿六日八十七

衣手杜 いにしへハ松尾の西にありしが洪水に漂流し樹木絶て今ハ無となる衣手社ハ松尾の摂社

續拾 秋毎にたれかの染らんきえてぬれつる乃衣手の杜 兼輔

續千 涼しさに立よる杣に木をれ林風そよく衣手の杜 為氏


月読社
葉室西芳寺
桂の里
久遠寺
葉室山浄住寺
月読社
西芳寺
けごんじ
久遠寺
京極殿別荘
地蔵堂

洛の西うら樫本ㄟ背掛の
里大枝坂ハふるきより樹林繁り
て岩ㄟ渓源ありて岩幽なり
子規啼くをきゝて都ㄟ竪宮に
かくれぬいさら夜の月の清
げなる紋流もかく寂し
て流離せる身何心のなるの
一聲小杜鵑のさびなく
孫むりとさまにも
韋應物が詩の心にも
ちらし

西芳寺ハ松尾の南葉室にあり禅宗にして本尊阿弥陀仏ハ聖徳太子の作なり開基ハ聖武帝御宇天平年中に行基菩薩中興ハ夢窓国師也方丈の庭ハ夢窓の作也庭中の造化四時の風光玄妙にして又比類なし

西来堂 仏殿をいふ本尊ハ来迎の像也額ハ西芳精舎と書け 瑠璃殿 無縫閣の閣下をいふ 釣寂菴 書院なり 邀月 [illegible]精

龍淵の傍の小亭をいふ 貴風店 小店をいふ 山頂へのぼる道の側の 縮遠亭 小亭をいふ 絶頂の 黄金池 池をいふ舟の泊る所なり

合同船と向上関 方丈より指東菴への小門をいふ 指東菴 開山夢窓の塔あり向上関より入つて庭中の佳境なり南面の小菴なり指東といふ是真如親王山居の旧地なり国師此室に入つて示寂を遂る

かくせたゞ道をバ松の落葉にて我住庵と人にしらすな　夢窓

湘南亭 池中の亭をいふ橋を邀月といふ 潭北亭 仏殿の西にあり其庭に紫竹七茎あり 貯清 楼をいふ北斗七星を標とす

山の小院をいふ 士峰一覧 貯清の南をいふ比叡山向ふ所に 影向石 夢窓国師親秀に命じて製る亭 一字なり構てこれなりあり

と開くるの日異人七人来つて其力を持る石を動し此石穿つて自中に得る教部あり其石を以て向ふの此りて夢に御日庭の紀条池成就し白首老人此石上に坐して曰我毎日ここに来て日向をもらひおのれ樹下にさぐる(?)此漢に松尾明神なり語てあるの所の初童に神託して曰天照大神毎日此石に来向するとぞ此石ハ石を鎮守とす一説に夢窓国師十道の石を運ぶ時に御供する者よりあるかし故に此ある人来る大石なるのまへに向ふとし一説に達師時に来る夢窓より此石を以て向ふとしれぞ洛四条あたりの者とも三夢窓のか衣(?)を作るなりあさん

らんじ具がそろして端杖一ね殊し並ぶる後に四条住心院深殿地蔵の所に

けた伴のけさなぞうけらりし錫杖なるなり今その錫杖ハ天龍寺にありとぞ

衣笠山地蔵院ハ西芳寺の南にあり禅宗にして天龍寺に属す本尊ハ

地蔵尊にして開山ハ宗鏡禅師也夢窓国師の法嗣にして旧此地ハ衣笠内大臣

家良公の山荘なり後山なる衣笠細川頼之当寺を建立して諸堂厳そなる

応仁の兵火に罹て亡廃す字を碧潭と号し 今延慶寺のこ遺まる 不動の井 衣笠山の麓にあり

葉室山浄住寺ハ禅宗にして黄檗派也本尊ハ如意輪観音 坐像七寸 天竺仏

にてて鉄牛和尚感得の尊像なりいにしへの開基ハ興正菩薩として此所ハ

葉室中納言定然寺を建て閑居し給ふ年ふりて寺廃すを元禄二年鉄牛和尚再興して禅刹とするとかや

天鼓森 下山田の西にありして

文徳天皇陵 小社あり由来未考 下山田の南 陵村にあり 御霊社 中桂村にあり橘逸勢を祭るとぞ

桂川 大井川の流にして舟渡しあり丹波道なり川の西にあり神代の時月読尊降臨しましませし上野橋八十町をそ小にあり梅津の南なり 桂里 おなじ桂樹あり故に號るとぞ粉の名なるへし

続古今 久かたの月のかつらの里のさと衣うつ声ぞ月の色に○うつる哉　定家

廻地蔵 下桂にあり華洛七道の一なり 毎歳七月廿四日群参す

久遠寺は桂の西川嶋にあり 此所を寺内といふ 西六條本願寺の懸所にて西山御坊と称ス

阿弥陀堂 本尊ハ安阿弥の作 開基ハ覚如上人なり 当宗の開山親鸞上人より第三代にして道徳兼備の上人なり 観応二年正月十九日八十二歳にして入寂を

覚如上人塔 堂後にあり

ケチケチの面 当寺にあり 本傳の面なり 旱の年里人これを取出し雨を祈れバ忽チ其験あり 一年西六条本寺の宝蔵に収しに寺内震動して止ズ 又此所に返し今にあり 当村に災ある時ハケチケチと鳴て其の凶瑞を知らしむ 故に名とす

大枝坂ハ樫原の西一里にあり 峠の西老町ありて山城丹波国堺の立石あり 此所民家多し 峠の里といふ 丹波王の老ノ坂と号ひ

□び賣る人酒呑童子首塚 此所にあり 大江山の鬼神を平けて首を此所にうけしとぞ

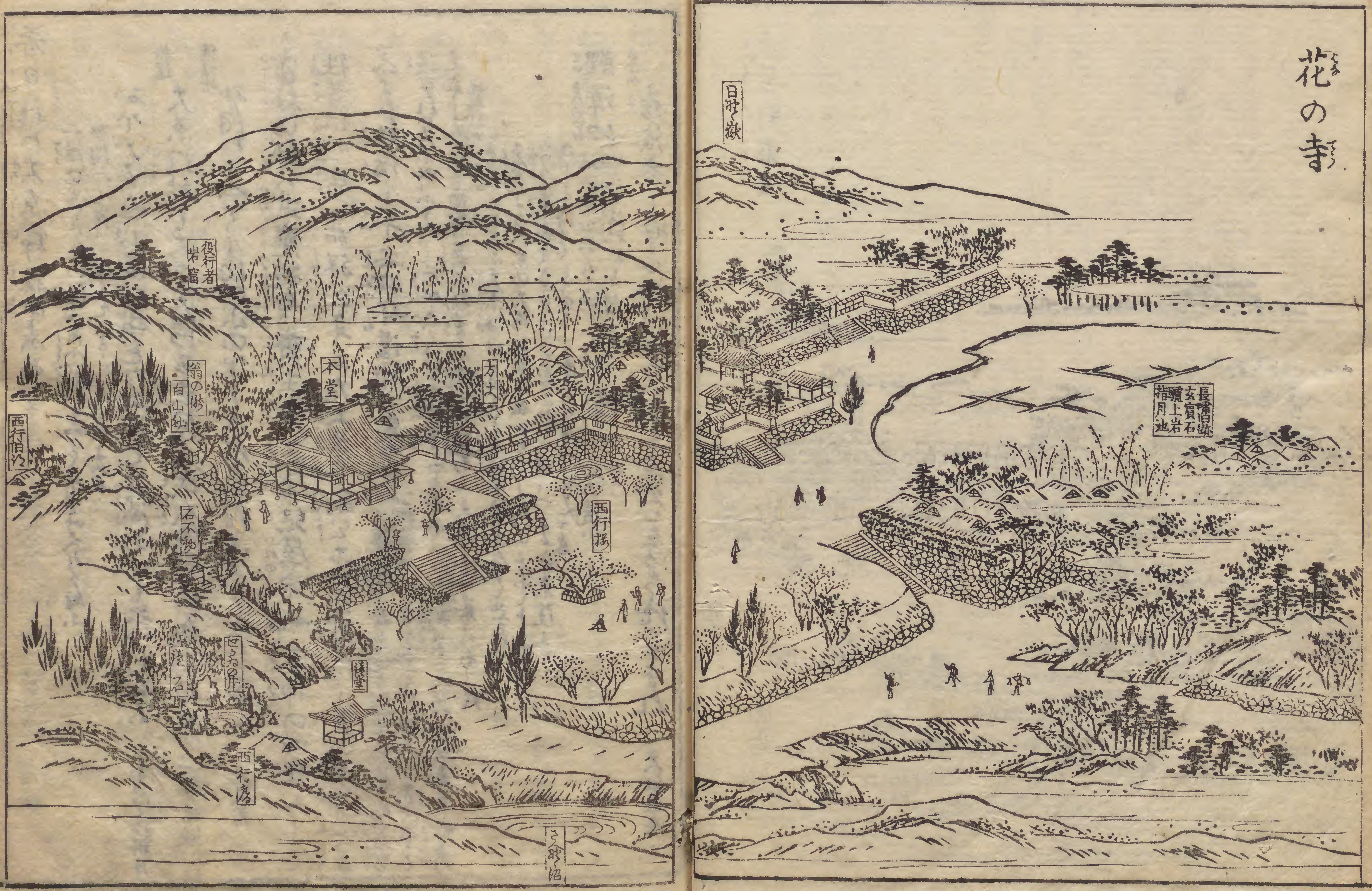
市場あり 大福寺と號す 大枝坂の茶屋にあり 昔し市盛長者といふ者の一人の娘あり難産

峠地蔵 産にかゝりて空しくなる 恵心僧都此所に宿し持念観法の時かの女顕れ出冥土のくるしみを救ひ給へと願ふ 僧都いろいろの法門を説給へバ女いふやうかゝる苦患をまぬかれなバ我誓ひをたてゝ産婦の難死を救はんとて地蔵となりて安置し侍へと云終って失ぬ 此ゆへに此の女の塚まもりしとて栢樹を植て地蔵尊を作り一宇の堂を建て安座せり 今の本尊これなり

唐櫃越 葉室の浄住寺地蔵院の間より丹波の王子村へ出る間道なり 俗に大坪の松数株あり 洛陽五条の西に見ゆる

大原野 樫原より坤二十町ばかりにあり 民村多し いにしへより山野の里都の名に詠じ

雉子啼大原山の桜花ちりにはあらで志をれしぞする　藤原實方


花の寺
役行者岩窟
白山社
本堂
方丈
西行桜
石不動
西行庵
長嘯旧跡
玄賓石
指月池

春日社は大原野林中にあり

古今 二條のきさきのまだ東宮のみやす所ときこえける時に大原野にまうでたまひける日よめる

おほはらやをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ　なりひらの朝臣

拾遺 大原の神もしるらんけふの恋は氏人のおもふ所あらん　一條攝政

後拾遺 おほはらやをしほの山のさかきばぞこれ神代のためしなるらん　左大臣

當社の神は武甕槌命 齋主命 天津兒屋命 姫大神の四座にして往昔仁明帝嘉祥三年に左大臣冬嗣公志をおこして南都三笠山より勧請し平安城守護神と定めたまふ 五條后順子始て詣たまひしより藤氏の后宮行啓ありしより奈良は都より道のほど遠ければ大原野にうつし后妃夫人の参詣をちかくあらしむ 之例祭は二月上の卯日 仁壽元年より始る 南都薪の神事に准じて能ありしが毎歳にはあらず

源氏行幸の巻に その志はすに大原野の行幸とて世にのこる人なく見さはぐ 朱雀より五条の大路を西ざまにをれて桂川のもとまで物見車ひまなし…六条院より御みきくだものなど奉らせたまへり 下略

鯉澤池 社の南にあり 中将の跡神社にあり

瀬和井清水 池の傍にあり

夫木 床なつかしきせがゐの井はおほかれど庭火は恋のおもひこそすれ　大江匡房

小塩山勝持寺 春日社西にあり 花の寺といふ 宗旨は天台にして本尊は薬師如来 傳教大師の作 本堂の額は小野道風の筆 當寺そのかみの開基は役行者にして自作の不動明王を本尊とし大原寺と號す 不動尊今堂内に安置す 伽藍僧坊四十九院魏々として巌重なり 年経て破壊に及びしを佛陀上人再建す 文徳天皇佛陀上人を御帰依ありて伽藍をいとなみたまひし 岩窟 石不動は弘法大師の作なり 西行法師像 西行櫻にあり 堂前の右 西行菴室 山上三町ばかりにあり 当山の境内に櫻花多し 盛の比は都下の貴人雅客ここに来って終日花の陰に遊びて西行の霊魂をもなぐさめし 石塔の下 辨財天社 池のかたへにあり 瀬野沼にあり

ますへ いかにふけさけりえぞかし波や氷るらん小塩の山よ雪ふりはべく　光俊

毘沙門天 傳教大師の作 本堂に安座す 毘沙門菩薩は化なり 役行者像 堂内に安置 白山社 當山の鎮守なり

二王門 金剛力士を安置す 阿の像は運慶の作 吽の像は湛慶の作 玄賓石 林の中にあり むかし玄賓僧都此地に住ありしところ

慈鎮和尚も此地に隠れ住みしことありてよめる

續後撰 東路の宿はありともとけなくに世をいとふ人の住かなりけり　慈鎮

元和年中若狭守勝俊世をさけて此山に幽居せられしを名ハ天哉翁長嘯子と自称して其のち東山霊山にも居をうつしけり 此人和歌に名高く挙白集あり

長嘯塚 孫生擬驪上岩 細川玄旨幽斎も長岡に閑居せられし時連歌の宗

指月池等此地にあり

匠紹巴を伴ひまつりて此まゝにおいて元亀二年二月五日より連歌を興行せられしことあり後大原千句とぞ世に名高し

連歌の懐紙を堂舎の什物とす

長岡の都ハ桓武天皇延暦三年にみやこの京よりうつされし大内の地ハ上羽村の辺にありて字を御所垣内といふ 乙訓郡の南より山崎のふもとまで南ハ長岡と號す此地に都のありしは十三年の間にて今の平安城にうつされし

今ハ西の岡といふ 西の岡といふ名所

古今 なりひらの朝臣の母のみこ長岡にすみ侍りける時なりひら宮づかへすとて時々もえまかりとぶらはず侍りければしはすばかりにはゝのみこのもとよりとみの事とて文をもてまうできたりあけて見ればことばはなくて有けるうた

おいぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君哉

返し

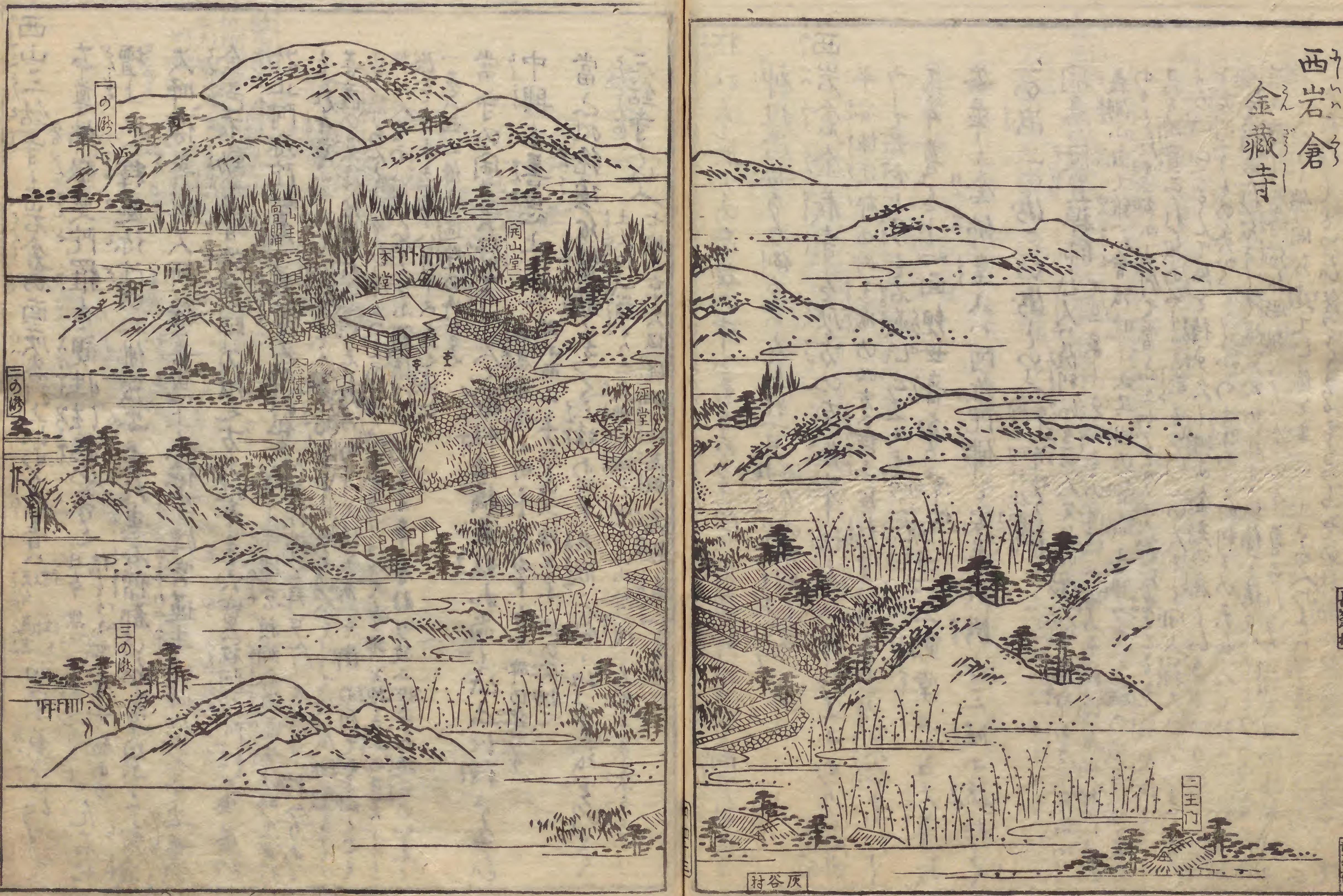
世中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子のため

なりひらの朝臣

栢社ハ西方の南林の中にあり祭る所ハ大歳神にして向日社地主神なり御母すり例祭ハ九月廿一日 拝殿において能あり 此所の産神とす

西岩倉金蔵寺ハ西方の南長峯坂本の西山上にあり 桓武帝の御宇平安城遷都の時王城の四方へ経王を収らる此所も其一所天台宗にして岩倉と号を石蔵ともいふ山上にあり 向日明神の御作 本尊ハ十一面観世音なり 向日明神の不動堂又ハ五大尊を安置し念仏堂又ハ阿弥陀仏を安置す瀧ハ三段に流れて一の瀧二の瀧三の瀧といふ 向日明神化現し給ひし所なりとぞ

開基ハ隆豊禅師此人ハ薩州の人父ハ薩摩太守重命なり十五歳にて義渕に就て維摩会を暁し又呉国の智蔵に随つて三論の微旨を究め ある時霊夢によりて当山にのぼり弓箭を帯せる老翁を見る 隆豊其翁をたゞし玉ふに翁こたへていはく吾ハ金光の麻をしりて久しく此山に住て汝を待こと久し此所に霊木あり千手の像を造りて安置し守護神となり給へといひて失ぬ 隆豊霊木を得て千手の像を造り又日に此地に伽藍を建て此像を安置し仏閣を建て彫刻せり今の本尊これなり翁ハ向日明神にてましまし守護神となり給ふといひ伝ふ


西岩倉
金藏寺
一の瀧
山王
向日明神
開山堂
本堂
念佛堂
經堂
二の瀧
三の瀧
長峯村
二王門
灰谷村

三鈷寺

西山三鈷寺は岩倉の南西谷の上にあり宗旨は天台真言律浄土四宗兼学にして
本尊佛眼曼陀羅は観性法橋の筆也（日本無二の曼陀羅にして左右の信ずるに霊應奇驗あり）
壇上には釋迦弥陀の二佛を安置す恵心僧都の作也堂内には智者
大師像善導大師像善恵上人像宇津宮蓮生法師像等を安置す
金色不動は智證大師の作也方丈の本尊には寶冠阿弥陀佛を安置す
拘止阿弥陀如来は慈覺大師の作也（むかし宇津宮頼綱入道蓮生法師生身の阿弥陀佛を拝せんと信心ふかゝりける
しかれば本尊に向つて念佛しける半ば会ふしぎとす人として同体の如来あらはれ
菩薩の来迎を拝れ感信ましまして涙を流し藪を出ありて雲に飛ととも
に飛帰らんとし給ひしかべその御袂をかすがひにて本師を抱き止め奉りしと
抱月人ておもふ所に則ち御鏡にはその本尊あり故に世の人抱止の如来と
稱すと貞永元年八月十五日の縁起
一説に西三条道遥院の御筆也）
當寺の開基は源算上人也観性法橋慈鎮和尚も此山に住し給ひ
中興は善恵上人也（善恵廟塔の町ばかり山下あり碑の銘あり世に西山上人といふ浄土宗一派の開祖也）
當山は絶頂を髻嶽とぞふつくゝる峰ありて其形ち三鈷に似たるを以て名く
三鈷寺といふ（土人曰く此嶺より二大佛七城見ゆるといふ所謂二大佛は京奈良也七城は京大坂淀郡山高取高槻亀山等也）

西山(にしやま)善峯寺(よしみねてら)

續後拾遺

暮てり秋の名残を小塩山鹿ぞこよひや鳴あかすらん

中臣師宗

小塩山十輪寺

西山善峰寺は小塩の西北にあり天台宗にして本尊は千手観音なり

此本尊は加茂の神木槻木より行円法師奇瑞を得て弘仁法師を招て千手の像を作らしむ且洛陽革堂の本尊も其余材をもつて六人の像を作る当寺本尊是なり

阿弥陀堂の本尊は慈覚大師の作二重塔には大日如来を安置す

開基は源算上人　旧因州の人にして狐とうり道のくまに捨られし此所の人拾ひて養育し比叡にのぼりて剃髪受戒し四十余年登壇重受の功を積恵心僧都の弟子となり又峯を慕ひ此山に来り石上に坐して七日夜坐禅を勤行して老翁形をあらはし此山の主知坂神とかの上人早く佛場を建立して大に可なりと山に柞定猪来て険難を平にして化して去玉ふ天聴に達し後一条院御宇長久二年の秋伽藍成就しおはんぬ

白山水　当山宝光坊にあり源算上人如法経書写せられし白山権現出現し五彩の雲乱れたなびきたり

仙翁石　源算の傍にあり源算上人観念しぬる所にて坐禅石となん

阿智坂社　当山へ登る七曲の中にあり此寺の守護神なり

観性法橋慈鎮和尚尊円法親王等の墳当山の北にあり

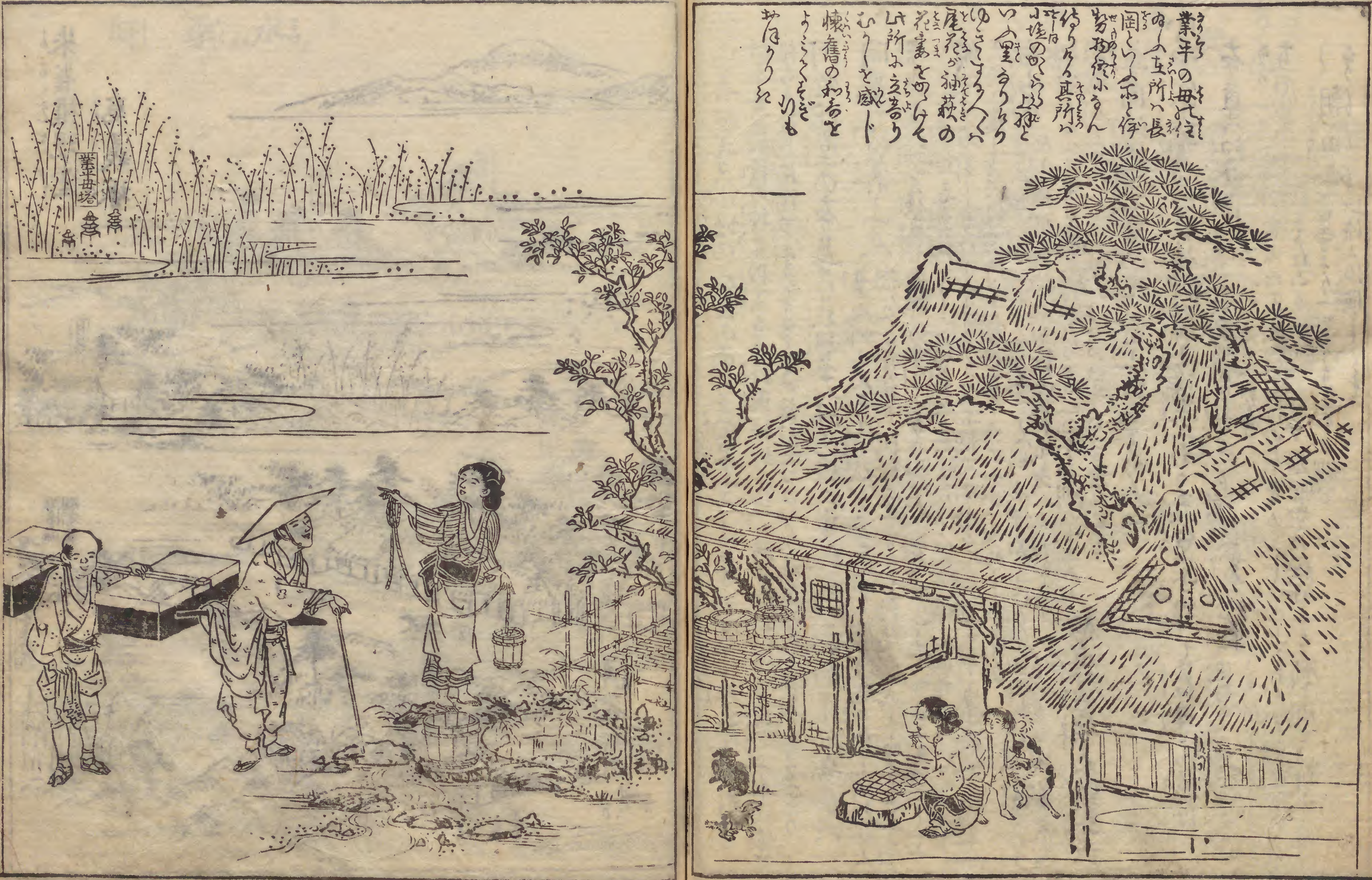
小塩山十輪寺は若峰の麓小塩里にあり天台宗にして善峰に属す

本尊は観世音　花山法皇西国順礼のみぎり詣ぬ故に禅衣観音といふ　腹帯地蔵　染殿皇后安産平安の為作りたまふ像也

在原業平塔　当山西の塩竈古跡　本堂のうしろ山上にあり業平塩屋の京にありしとなん多くの夫をして難波より潮を汲せ此所にて焼し

潮溜池　当寺より一町斗東にあり湖を此池に汲溜しとぞ

業平の母の住
給ひし所ハ長
岡といふに伊
勢物語にみえ
侍りける其所ハ
今ハ小塩の田くら上羽と
いへる里なりける
ゆかしくすゝくへ
と尾花が袖萩の
花妻をかけて
此所に文章あり
むかしを感じド
懐舊の和哥を
よみこそぞりも
おはりけれ



水薬師

朱雀権現堂 為義塚

権現堂ハ七条千本通にあり本尊ハ勝軍地蔵にして聖徳太子の作 愛宕権現の本地佛なり 脇壇にハ聖徳太子の像 御自作なり 又対王丸の守本尊地蔵を安置す そのかみ対王丸人商人に勾引て行道より逃帰て此寺を頼みけれバ住僧人商人どもおひ来りけれバ恐れて地蔵の櫃に隠して天井にかけ置きしかバ身をかくして地蔵あやしみ開たりけれど此本尊身代となりて此難を救ひ給ひしとなり 当寺ハ権現寺と号し浄土宗なり本尊阿弥陀佛ハ恵心の作なり むかしハ歓喜寿院といふ洛中封疆数の中七条通の南に歓喜寺の森とて旧跡あり又洛外西口の守公堂の口とりて往古ハ此辺境内にして真言宗なり 旧寺の図当寺にあり

源為義の塚ハ権現堂の前 朱雀の古蹟町といふ為義坂 民家の間にあり 保元二年後白川院の勅をうけし源義朝田原にて鎌田兵衛正清に申付て為義を誅せし所也則権現寺の持地なり

嘉屋御所 朱雀の西道の北にあり田原故左勢卿の宅地なりしとぞ

藪の中に松尾明神御旅所 西七条より朝勝寺村に及ぶ 小社あり 七社の御旅所あり

綱敷天神 西七條小側にあり

靱負天神 綱敷の西にあり此宮の東南小の道あり大内裏の右京にして靱負通之故よばれし

水薬師寺ハ西七條の南にある本尊薬師如来 延喜二年池中より出現 弁財天社 本堂の乾にあり 社の下に清泉涌出る平清盛熱病の時此水を汲んで浴せしとぞ 弁慶石 後ニ堂のまへにあり古ハ三条弁慶石町にありしとなり

門の額 水薬師寺と書を当寺近年の住職泉南の筆なり此人草書を善くして世に墨跡多し 明和六年寂す

川勝寺ハ西七條の西七町にあり むかし秦川勝か盛建立の所なり 西院村の中所々にあり

西寺ハ旧跡梅小路の南になり 今松尾御旅所のしるし神輿神供所とし 守敏の像ハ梅小路西方寺にあり

唐橋ハ四ッ塚の西六町にあり 秀吉公朝鮮出陣の時此街道を通らんとて唐橋を号し又拾余[illegible]

むかしより唐橋通あり それハ東寺の小くらより此條に川ありて その下流にかゝる橋なれバ唐橋といふ 今ハ人家へ[illegible]

吉祥院天満宮ハ唐橋の南にあり 本社を菅神とす 吉祥院にて吉祥天女を安置す 伝教大師の作なり 此所ハ菅家の御領地にして別荘あり 菅家の祖清公卿延暦二十三年遣唐使として異朝に赴く時船中にして風波の難に値ふ 此時祈りしも伝教大師求法の為に入唐し則同船して吉祥天女の法を修して忽ち順風吹て帰朝せり 故に伝教大師吉祥天女の像を造る 清公卿ハ此地に堂舎を建て 其像を安置し吉祥院と号す

石原井 まへ唐の傍にあり 歓喜[illegible]近年書家[illegible]

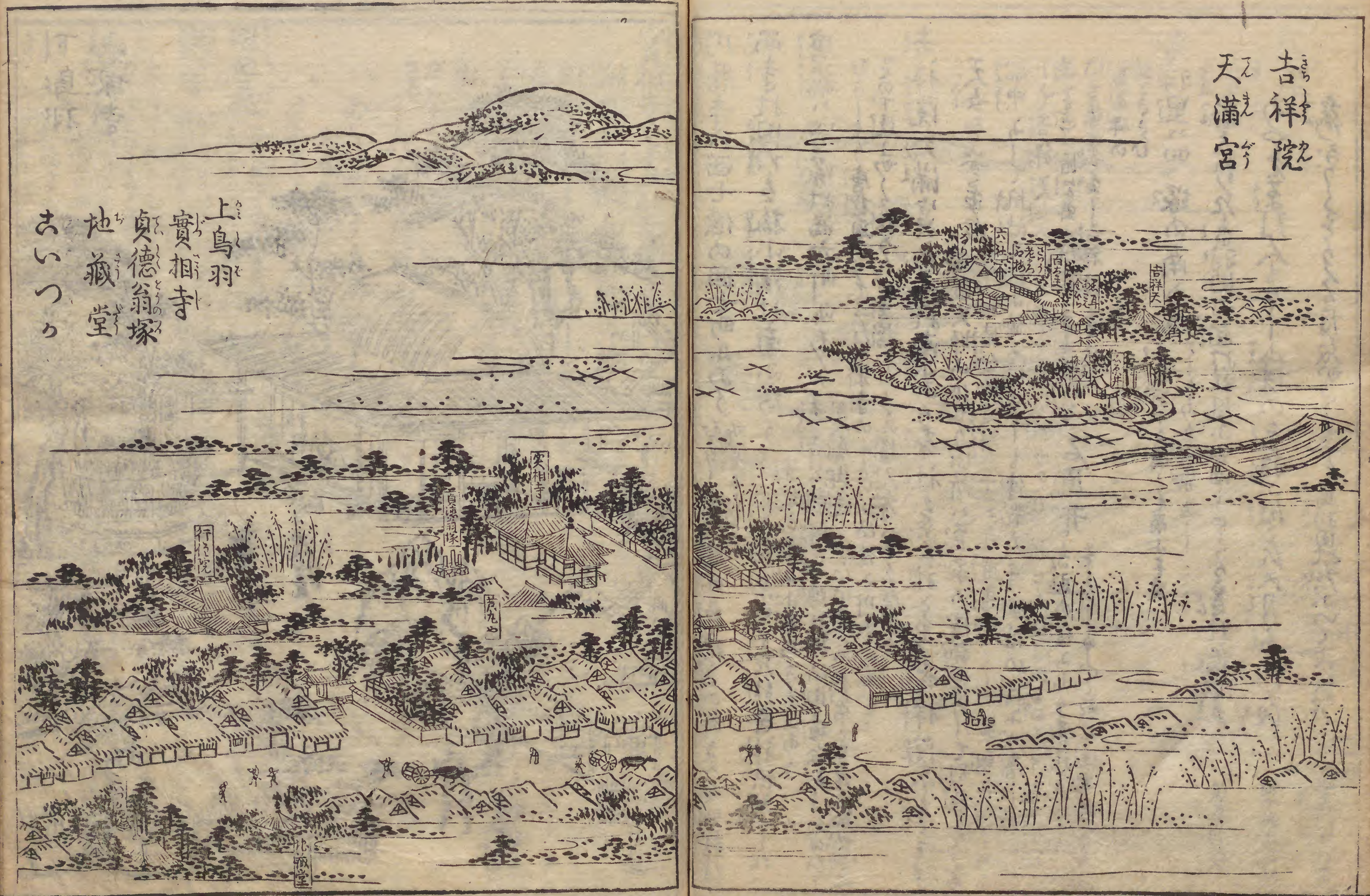
鶯居碑の銘をきざむ

鳥羽里ハ四ッ塚の南なり 上鳥羽下鳥羽とて南にあり 民家多し

續後 秋ふけぬる鳥羽田の面の秋風に玉ゆらしめる宵の稲妻　後鳥羽院

同 あやめ草引く人もなし山城の鳥羽に波こる五月雨の比　前中納言匡房

同 露おもる小萩がすゑの風しきて鳥羽田の穂にいくよ寝ぬらん　安嘉門院四条


吉祥院
天満宮
上鳥羽
實相寺
貞徳翁塚
地藏堂
まいつり

下鳥羽
戀塚寺

實相寺ハ上鳥羽西側にあり法華宗にして開基ハ大覚上人なり本堂乃脇壇に松永貞徳翁の像あり　子ハ芦丸と云ふ又ハ長頭麿又圓陀麿とも称す　松永弾正久秀か落胤にて天正五年大和国信貴城滅亡のとき六才なりしが母方の親族にやしなハれ成長の後武道を捨て細川玄旨斎を師とし長嘯翁を友とし和哥をよくし俳諧を以て世に鳴る

蘆丸屋　本堂の巽にあり貞徳翁閑居しゆひし所なり

貞徳翁墓　芦丸屋のうしろにあり塔に銘に又逍遊軒明心居士とあり

應二年十一月十二日
卒八十二歳
家集
これ死なば桜に花をたてまつれ佛にちかき人や来らん　貞徳
日
あれハ何くとききの神のひいきもち神へくる世にはすへ(?)　仝
長嘯翁西山へおもむきけるとききつかハしける
日
どふかくに月をうつせ世にすまし(?)やかくる出る山に入らん　仝

廻地蔵　實相寺の南東側にあり六地蔵巡の一所なり　毎年七月廿四日群参す

觀音堂　地蔵堂の南に隣る　聖観音を安置す

戀塚　觀音堂の南浄禅寺の門前にあり羅山子の碑の銘あり建る預主ハ永井日向守直清なり恋塚二ケ所ありいづれとも決しがたしある人の日むかし此所の池ありて年経し鯉ころむ土人これを捕りてここに埋むとて故に鯉塚ともいふとぞ

小枝橋　鴨川のながれにかかる橋なり上鳥羽の南なり　民家を小枝町といふ

久我畷　上鳥羽の南北端より久我の里までへて山崎にかよふみちなり往還しるし

秋山　小枝橋半町ばかり南にして茶店の向ふなり鳥羽法皇城南離宮の苑なり四季の風景をたのしみ紅葉など多く植させ給ふ所を秋の山といふ今纔の圓山遺なり

続後拾 衣うつ鳥羽田の里の稲莚いくよになりぬ秋の山風　俊光

新後拾 夕日さす秋の山本霧はれて鳥羽田の稲葉露にみだるゝ　等持院

恋塚寺ハ小枝の南八町ばかりにあり 堂の南に塚あり 銘に曰 渡辺左衛門尉源渡妻

袈裟御前秀玉善尼墓 天養元甲子年六月廿四日文覚上人開基恋塚根元の地 嘉應二庚子年建立とあり

遠藤武者盛遠 出家して文覚上人 渡の妻に恋慕して千束の夜をまちるに真言に随ひ渡が姿と成盛遠に斬られし貞女の操成給ひし世の在る所なり

法傳寺ハ恋塚の南にあり 始ハ真言宗にして本尊ハ薬師佛を安置せしに 行基の作 洛東智恩院住職圓智上人此寺に閑居して浄土宗と改む 門内にあり

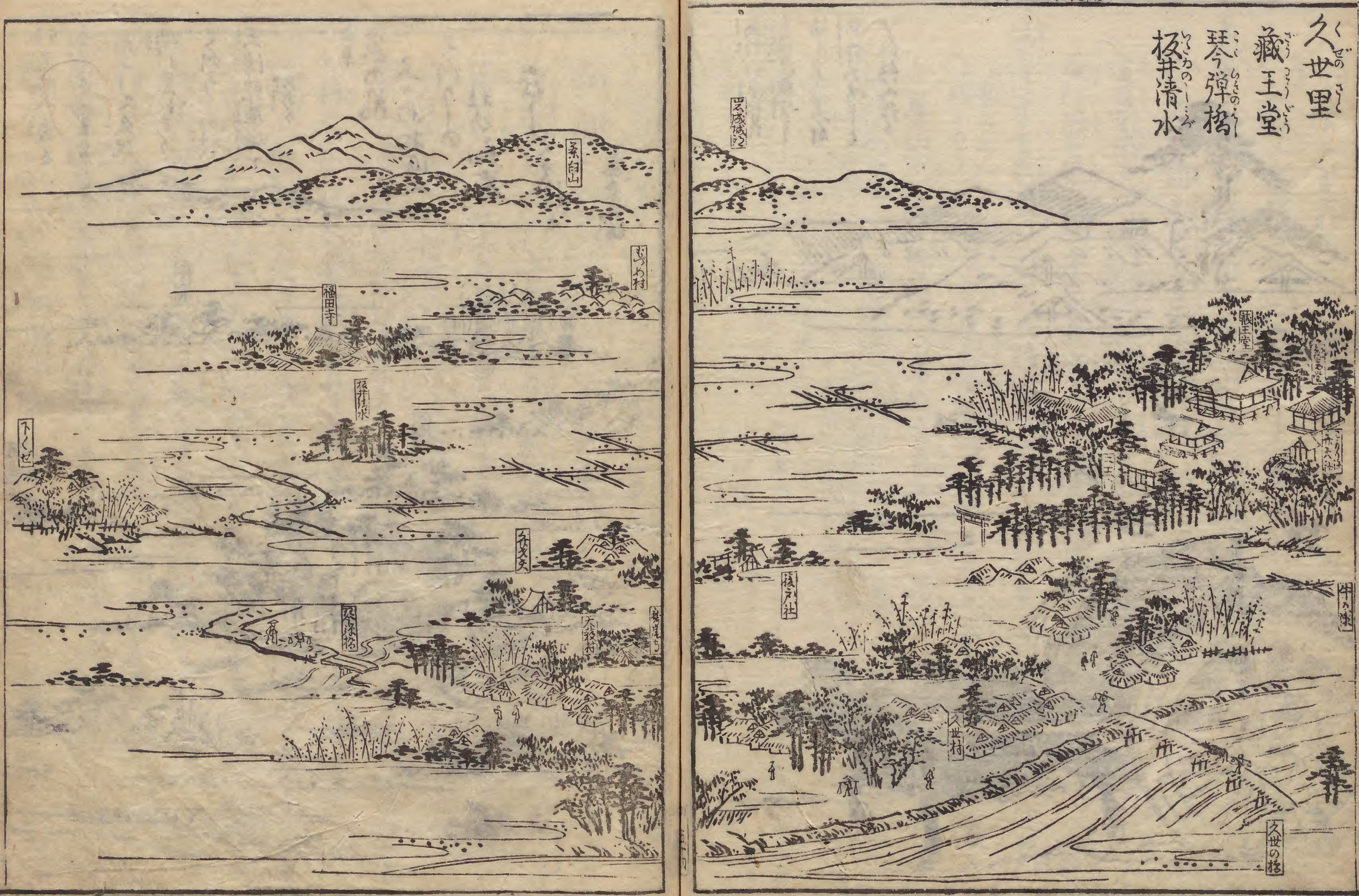
本尊の阿弥陀佛ハ恵心の作 善導大師像 法然上人の作 法然上人像 西山上人の作なり 二祖対面の像といふ

方便水 門内にありて昔聖人を多くあつめ念仏を唱へさせて井を堀しゆゑ此名あり

一念寺 法傳寺の南にあり 本尊阿弥陀佛ハ春日作なり 開基ハ真阿弥陀佛といふ

横大路ハ下鳥羽の南に續く むかしの道ハこれより西へ分りあり 秀吉公の代に此所を運送する舟着なりしより伏見京まで荷ひきる又法皇の茶大坂より此所より送りしよりて新町ともいふ

久世里
藏王堂
琴弾橋
板井清水



羽束師の東南
久世より一里斗
南にして久我
畷の東にあり
こがりの杜ハ
天津児屋命を
祭る

金葉
家の風ふかぬ物ゆへ
こがりの杜の言の葉
茂しくぞ侍る
藤原顕輔

上久世蔵王堂ハ医王山光福寺と號し宗旨ハ四宗兼学にして本尊ハ蔵王権現役行者の作又二王門の金剛力士ハ聖徳太子の作也 此寺の初ハ村上帝の御宇天暦年中にかく浄蔵貴所開基也 吉野の奥金御嶽に盤に籠りて一心に密法を修ひまより洛に登んとして夜遊にあく現ゆもあるぞ蔵王権現忽然として現れ給ひ宣ふハ汝常に法施怠らずして神妙の至りなる今都に帰らば我をも供をせよと有縁の地あらんとて浄蔵貴所奇異の思ひをなし苔をはらひ袈裟を解て肩に結び背に則頂奉りて洛をさしに忽化して本像となりたまふ桂川の西なるかくら坂上りしに持したる錫杖溝の水に落て水さらに流れかりそこの所にてもありし又一つの森の上に光明あらはれてこれハ弁財天の霊場ならん故に蔵王の神像大石のめぐりにて動く足で有縁の地と悟りて則草座にをきて本尊持念をはじき夜西の所に大きなる椰生じ又明星天老翁あらはれ椰に向て弁財天医王善逝と唱へて拝を貴所去りて宮ハ羽を落て弁財天降臨の地なり今時するが蔵王権現此地より早く仏閣を建て安住せば利益廣大

ならんと云終て失ぬ貴所〳〵の名号を崇しむる一堂を営る像を安置に當る縁起の

綾戸社ハ藏王堂の南にあり牛頭天皇をまつれり 例祭ハ四月十六日之六月祇園會にも乳馬の頭を前りけて所作あるゆゑ當社より兼業出かけり

鷲尾寺ハ中ノ久世の西大薮にあり本尊ハ薬師如来にして秘仏にて尊像なり

いにしへハ巌窟より伽藍あり中頃回禄に及んで 小堂となり今曹洞宗の僧住持す

木下明神ハ此寺の西にあり兵賊天をまつる此里の氏神なり祭ハ四月己日之

福田寺ハ下久世にあり本尊ハ地蔵菩薩にして行基の作なり摩耶夫人の像を安置して世の人安産の為に祈る梁武帝のつくり給ひし赤栴檀の像なり

弘法大師入唐の時乞得て帰朝し摂州摩耶山天上寺に安置し後に此寺にうつす 旱の年雨を祈らん修を霊験あり

板井清水 此寺の艮にあり むかしハ福田寺の封境なり 僧恵法師雨乞の法を修せし

宇多天皇六代の苗裔信頼の子僧恵法師此ところに閑居を構へ道を遁せられば世の栄ハ宿因なく脱塵の志ろ起りて此るに従しかれば淵の深きも名をしらぬとかくハ鎖をさし所る[illegible]ものぞまだ見しすれ

千載

古への桜井の清水みくさゐて月さへかげをすまれぬるかな　僧恵法師

向日明神ハ久世の坤のかたにあたる所一坐にして鸕鷀羽葺不合尊なり 源氏神秘此所の氏神とす 例祭ハ四月中辰の日之 地主ノ神ハ本殿の南にありとぞ

ありて白日明神と號を素盞烏の孫大歳の神の御子之 白山権現と同体なり 延喜式神名帳

三代實録等に記ハ石座神と号 此の地ハ鳥井の内道の半にあり 世に成合様と称するハ

山城地主の神なり

向日山 當社の山をいふ又鳥見山ともいふ 勝山と号するは豊臣秀吉公朝鮮征伐として出陣の時ここにて宴ありて勝山と名つけ給しとぞ 此山の名を社人に給ひぬ

土佐日記

都とのみたのむひありて宮古ハ山に世ぬる人とかおもひや

貫之

秋風にさそはれわたる月かげ[illegible]むかひの山に男鹿なくなり　隆祐

あすもこむむかひの里のよそにて[illegible]ぞあはれなる　俊実

真経寺ハ向日町の東の端にあり法華宗にして日像上人住給ひし所之

寺戸の願徳寺ハ法菩提院と号し宗旨ハ天台にして本尊ハ正観音なり

開基ハ慈覚大師山門の別院とぞ

乙訓社ハ井内にあり春日四所の明神を祭れるよし 此里の氏神として祭ハ四月辰の日なり

向明神

大慈山乙訓寺ハ西岡今里にあり當寺ハ推古天皇の御願にして聖徳太子れ開基なり其後弘仁二年の冬弘法大師別當職に補し八幡宮れ示現れ影を大師れ像れ彫刻しすへに御首ハ八幡宮化現し神像をきざみすへ是蜜法擁護の為なりとて故に神佛合體の御影といふ當寺の本尊是也例載三月廿一日開帳あり又寛平法皇脱履のそのはじめ行宮としすへ是によりて法皇寺とも名づくいふしへに方境廣大にして伽藍巌重なり中頃南禅寺の伯英和尚住職し又武州護持院再興ありて眞言宗とあらたむ

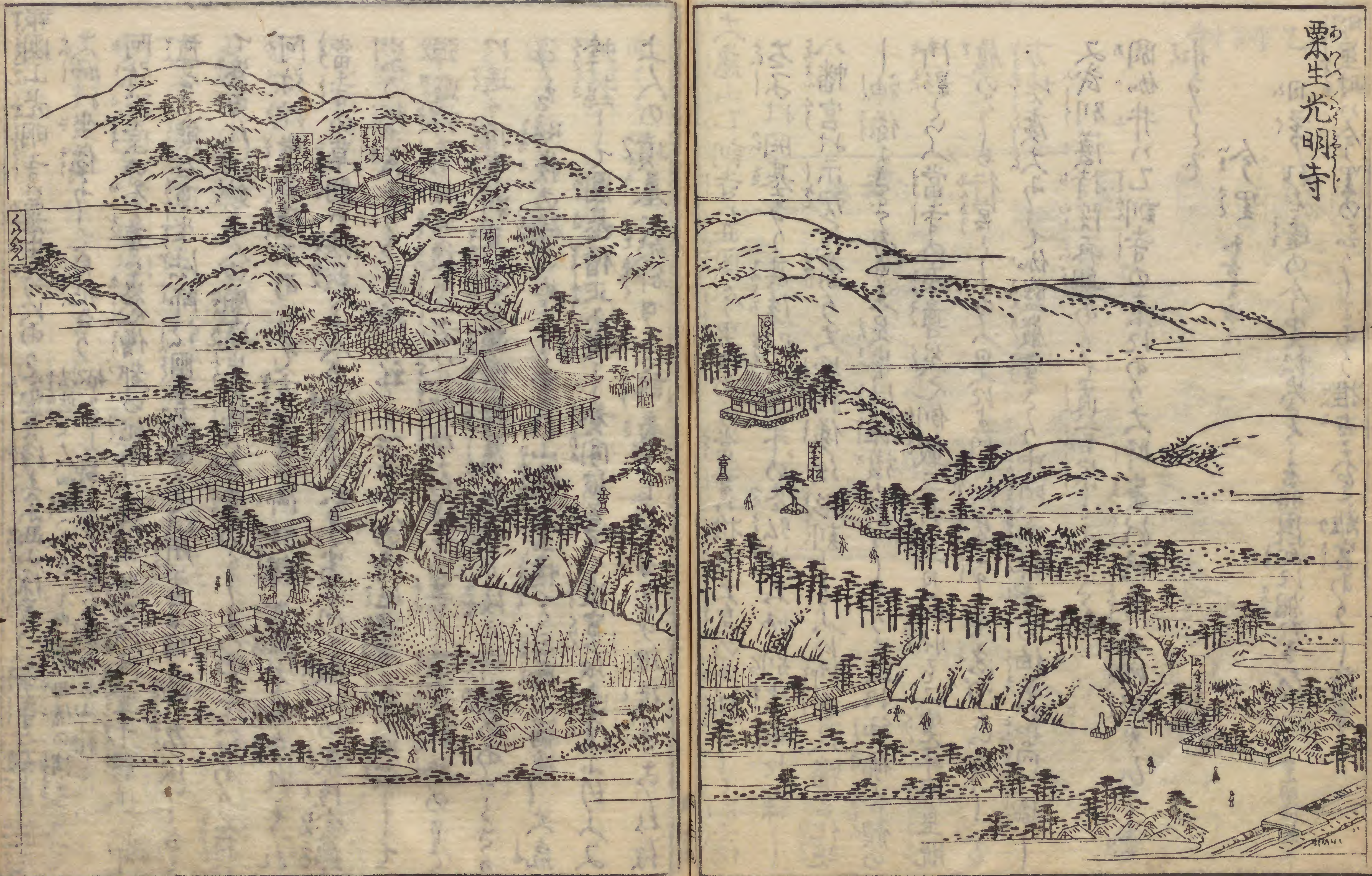
閼伽井ハ乙訓寺の東にあり大師蜜法修行の時汲たまひし靈水なりとぞ

今里 [illegible]

日暮れば遠の今里坂やくて名羽因西に烟たなびく　光明法親王

明星池ハ今里の乾にあり推古天皇離宮ありし所なり

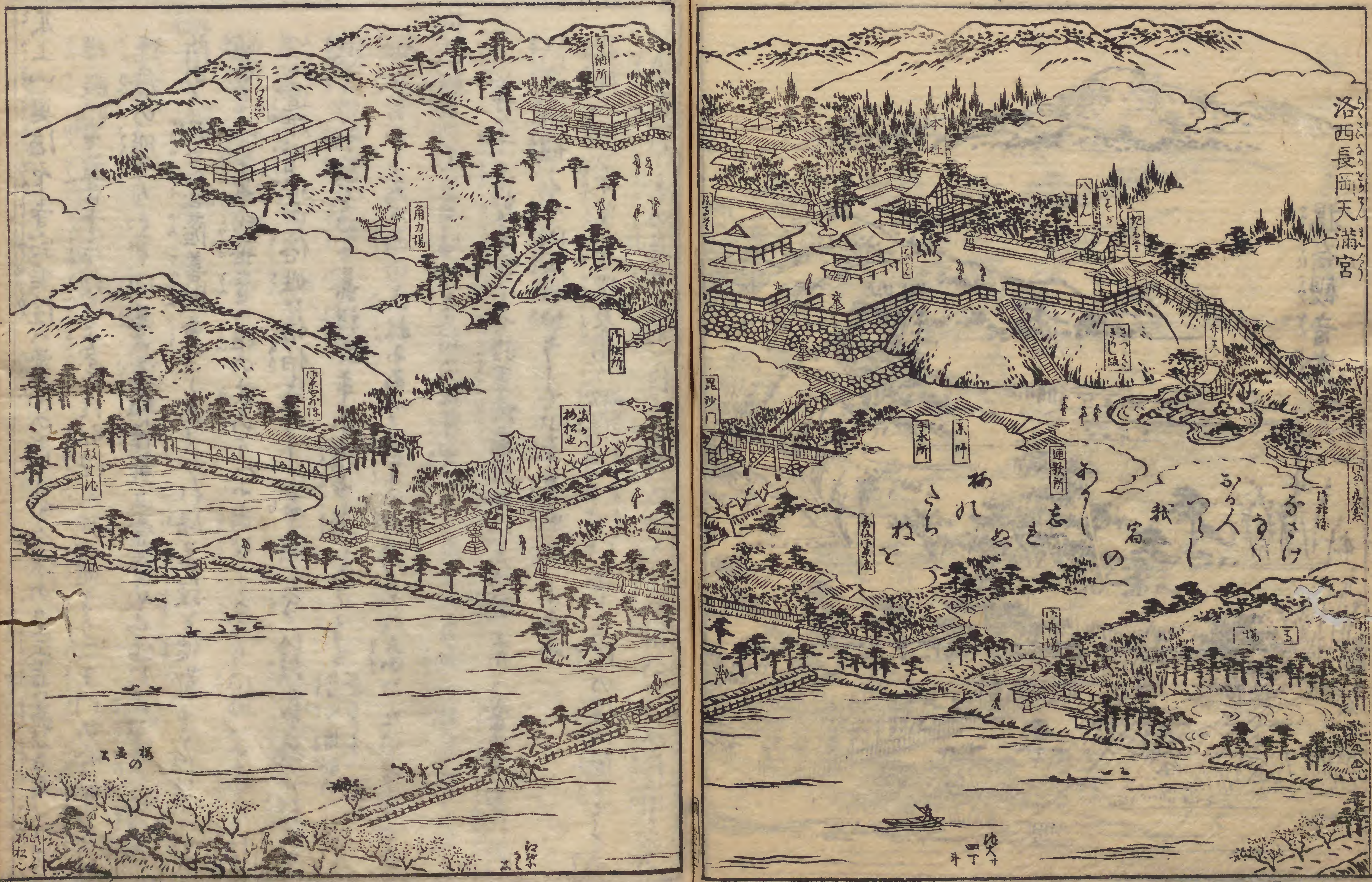
粟生光明寺



報国山光明寺ハ粟生野にあり宗旨ハ浄土宗西山流義の一本寺とす本尊ハ円光大師れ坐像ふして自作なり（法然上人四国へ左遷したまふの時母儀の消息を以て作りたまへる本尊なり世に張籠の御影といふ）阿弥陀堂の本尊ハ恵心僧都の作ふして江州堅田浮御堂千體佛の中尊なり熊谷蓮生法師法國を負ひ來りて此所ふとゞまり艸庵を結ひて安置し給ふ法然上人の廟蓮生の塔ハ本堂のうしろの山上にあり石棺ハ阿弥陀堂の傍ふありて方丈ふハ御鉢釋迦佛を安置してそれ當寺の草創ハ法然上人の滅後十六年ふあたりて叡山の衆徒念佛宗の繁茂をそねみ給ふ源空の御作選擇集を破して弾選擇集并擯堅者定照房といふもの著し隆寛律師のもとに送る隆寛則其答ふ顯選擇集を述て彼が僻案のあやまりをなすを暗夜の礫のぬしと書し山徒大ふ憤りて三塔ふ觸流し大衆蜂起して圓基僧正ふ談し奏聞を遂て隆寛を遠流ふ行ひ又上人の墳墓を破却せんと評義まちまちなりしかバ徒弟これを聞て大ふ歎き御墳の所へ行きて夜ふ入て人あつまり石棺を掘出し其外上人所持の霊像をそへて太秦來迎坊のかたへ送る其翌年安貞二年正月ふいたりて上人の石棺より光明かゞやきしかバ來迎坊あやしみて光のさす所を尋ねるに太秦より遥の南のかた粟生野にいたりて則此所に住せる幸阿弥陀佛のもとに來りて其趣を語るに幸阿弥も不思議の霊告ありてともに符合しまはり上人の遺弟たち太秦より石棺を粟生野にうつして是を開きけれバ上人の面皃宛然として存日のごとし則當寺の山腹にゐて荼毘し時ふ忽然として紫雲聳ふ匂ひ異香四方に薫ず則舎利を拾ふて廟堂を造立し浄土一宗の宗廟とす（紫雲を覆ひし所ニ松ありてこれを紫雲松と呼ぶ今堂前ニあり已上常縁記の意をとる）惣じて當山ハ勝景の地にして山林の繁茂ハ宝閣をかこみ常行念佛の聲ふんぶ講堂ふハ万巻をひらいて真如の月を探る秋ハ紅葉の風情ありて黄金を布く祇陀園ともいひつべし（當寺の本堂ハ近代の建立にして比類なし後代造立の規矩とす）

奥海印寺寂照院

揚谷観音堂


らくさいながをかてんまんぐう
洛西長岡天滿宮
本社
八まん
角力場
連歌所
手水所
毘沙门

木上山奥海印寺寂照院ハ粟生の南十町余にあり宗旨ハ真言にして
佛殿の本尊ハ千手観音安置す弘法大師の作なり二王門の金剛力士ハ
運慶の作なりとぞ開基ハ道雄僧都又當寺の山上に人破岩と号する
所あり妙見菩薩善財童子とあらハれ法華経を僧都にさづけし霊
崛なり又本尊観世音ハ椎の木のうへに出現しのちにこれを木上山と
いふ道雄僧都の俗姓ハ佐伯氏にして華厳を学び後に空海に従ひて
真言の密教を授る嘉祥三年に権少僧都となる 當寺傳記の意をとる
妙見のやしろハ西の山林にあり此里の氏神とす祭ハ九月廿一日なり

柳谷観音堂ハ奥海印寺村の西半里ばかりにあり立願山楊谷寺と号す
本尊ハ千手観音にして将軍地蔵毘沙門天の脇士あり當寺ハ白川院
御宇に観上人開居の地にして此本尊感得しぬよし
楊柳の滝ハ本堂の下壇左にあり 修行人此所に籠りて難苦をするなりとぞ 上なる流の渓川瀑となりて石
に鳴て流れ小倉の鳥井の前を経て山崎のふもとより淀川に入るれバ又位川といふ

長岡天満宮ハ開田村の西にあり御鎮坐の初ハ古此所に弘法大師開基の佛閣あり又
在原業平卿の亭館今此上羽の辺にあり菅公御幼年の御時業平御伴ひ此ちに来
れる管弦にとあり業平没し給ひて後も菅公時々ここに御入輿ましく佗傺を累
ね年の御馴染なれバ浅からず饗應のありし此村に昌泰四年菅公筑紫に謫遷し給ふ
由緒開路次すて送りまゐらせ別を慕ひ止時なし菅公自ら容を模して授け給ふ厥後
社を営て長岡天満宮と崇奉る 伽藍ハ兵火に罹て亡滅し古の本尊薬師仏 脇士十二神の内一躰残りて今此地に安置す
社頭の道の左右ハ池塘廣くして風生じてハ細浪灑ぎ萍蔵りてハ
魚鱗のごとく汀ハ紅葉多くして水の面ハ夕陽が揚へ秋の錦を
踟躊し風流いふべし

鞆岡ハ開田の南にあり

神道百首

いさくらぞ神のとの岡の紅葉をも手毎にとりて手向ません　兼邦

清少納言枕草子に
ともをかハさゝのおひたるがおかしきなりと書しハ此所なり

小倉のやしろハ圓明寺の里往還より十余町西の山林にあり本殿ハ正一位小倉大明神例祭ハ四月五日にして此あたりの産沙とす毎歳四月二日に猿楽あり京六条猿氏よりこれを勤む

圓明寺ハ小倉山の南にあり本尊ハ薬師如来にして聖徳太子乃御作なり當寺ハいにしへ堂塔巍々として九條殿下光明峯寺道家公の草創なり御子圓明寺摂政實経公晩年に及んで父祖の遺跡を弁ひかたく此地に山荘を構て閑居しつゐに逝れ此所に於て薨しぬ御墳小倉のやしろの巽にあり

歸海山寺ハ下植野にあり宗旨真言にして本尊ハ千手観音定朝の作なり脇士ハ不動明王弘法大師の作地蔵菩薩ハ傳教大師の作なりとぞ當寺ハむかし平家の代流刑せられし平判官康頼丹波少将成経常にあつく帰依おはしまして當寺の本尊に祈て遂に感應ある深く赦免の宣旨を蒙る其願成就ゆへ此寺を改いふとし之

勝龍寺城跡ハ神足の東にあり畠山右衛門佐義就これを築信長記に曰永禄十二年九月廿九日岩成主税勝龍寺の城に楯籠る

小倉明神

宝寺
八幡宮
大念寺

山﨑
離宮八幡宮
寳寺
観音寺
八大天王
久我畷
狐川

大山崎天王の社ハ素盞烏の御子八王子を鎮座しあつ之鳥居の額ハ小
野道風の筆なり山崎郷中より養御を流例祭ハ四月八日ニて神輿ニ基
當社勧請の年代詳ならず次神殿ニ銘ニ曰養老二年再興と書に今本
坊ニあり天王山の城ハ文明二年山名是豊赤松一族上洛して此城を築く
観音寺ハ天王山の東半腹にあり直言宗ニして佛殿の本尊ハ観世音れ
立像聖徳太子の作之祖師堂ニハ弘法大師の像を安置ス本食以空僧正
中興して今の如く再建あり 當寺の客殿より淀ハ勝の風景眼下ニあり遠て淀と僧の住境なり
寶寺ハ観音寺の南ニあり補陀洛山寶積寺といふ真言宗ニして本尊ハ
十一面観音の立像ニして聖武帝行基大士の合作 堂内の賓頭盧の像を行基の作之床下の石塔婆
聖武帝の御塔と三重の塔ハ大日如来を安置ス當寺の什寶に打出の小槌あり
聖武帝の御宇龍神捧しなり
妙喜庵ハ寶寺の麓ニあり禪宗ニして本尊十一面観音之千利休
此所ニ住して二畳敷の圍を建て秀吉公棋つく渡御ありて茶の湯ありしと
山崎の橋ハ桓武帝即位三年ニ是を造る中頃より空の橋をかけて絶てなし今ハ
舟渡しありて狐川の渡しといふ山崎の人家の南ニあり今の橋本の宿是之

山崎 谷れ観音

離宮八幡宮ハ山崎街道の中ほどにあり鳥井の額ハ行成卿の筆也神殿ハ八幡宮を崇奉りて社壇の下より石清水涌出る 左右ニ随身の像あり拝殿もきびしく例の如し 若宮のやしろ武内宿禰末社の傍に後の山ハ神降山といふ

當社ハ貞観元年四月十五日行教和尚宇佐宮に詣て八月廿三日帰洛し山崎にとまる時に村老出来れ和尚に對し去ル七月十五日夜此地へ神降の地ある其瑞日輪の如し又橘樹の木陰より清水わき出て異香薫を行教これを天聴に達し勅を奉て清水を神輿として神殿を造営しけるより離宮の名ハ當社鎮座のまへよりありて弘仁帝の御時の行宮にしまします山崎の離宮されたりし此宮室より勧請しますゆゑに離宮八幡と稱す

天満宮の社 隣りける石ハ筑紫へ赴き給ふ時此所に休ひ和歌を詠しまします

君がすむ宿の梢をゆく〳〵もかくるゝまでにかへりみしはや　菅贈太政大臣

宗鑑法師の幽居の地ハ天満宮の傍にあり 宗鑑ハ足利義尚公の侍童にして俗称ハ志那弥三郎範永といふ連歌誹諧を能して世に鳴る

関戸明神ハ山城摂津の国堺にあり此所に関所あり関戸院と号す今ハ町の名となりて関戸町といふ谷の観音ハ此町の南にあり 閻浮檀金の像を安置す山中にあり

国立公文書館
National Archives of Japan